



SYNTHESIS 2013

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 2013



INDEX

01	研究所概要	01
02	研究所活動	07
	公開講座報告	
	月例研究報告	
	ランゲージ・ラウンジ活動報告	
03	研究プロジェクト	19
04	研究業績	47

01 研究所概要





2013年度

教養教育センター付属研究所概要

I. 組織

◆研究所運営委員会執行部

所長：鈴木義久

主任：三角明子 猪瀬浩平

研究部門運営委員：大森洋子 黒川貞生

◆研究所所員

池上康夫 石渡周二 猪瀬浩平 植木猷 上野寛子 大森洋子 越智英輔 亀ヶ谷純一
金珍娥 黒川貞生 嶋田彩司 鈴木義久 高木久夫 高桑光徳 武光誠 張宏波
鄭栄桓 永野茂洋 名須川学 仁科恭徳 橋本肇 原宏之 原田勝広 福山勝也
三角明子 森田恭光 寄川条路 渡辺祐子 Grimes-MacLellan, D.M. Varden, J. K.
土屋博嗣

◆研究所運営委員会（* = 代表者）

・『SYNTHESIS』（年報）担当：*鈴木義久 三角明子 猪瀬浩平

II. 研究活動

1. 研究プロジェクト（* = 代表者）

- ◆生活習慣が青少年の健康状況・身体特性に及ぼす影響
*越智英輔 福山勝也 森田恭光
- ◆「教養教育としてのカフェ」研究：カフェ・ネットワークの構築とその意義
*猪瀬浩平 植木猷 上野寛子 三角明子
- ◆腱組織の力学的特性の新たな計測方法の開発
*黒川貞生 亀ヶ谷純一 佐久間淳 Pedro Valadaso Avela Janne Taija Finni
- ◆文化理解とコミュニケーション能力向上のためのスペイン語教育の試み
*大森洋子 原田勝広
- ◆日本の朝鮮統治期における明治学院留学生に関する共同研究
*嶋田彩司 金珍娥 徐正敏 鄭榮桓 渡辺祐子 佐藤飛文 野間秀樹
- ◆南西諸島の総合的研究
*原宏之 佐藤アヤ子 Grimes-MacLellan, D. M.

2. 研究報告会

日付	報告者	テーマ
第一回（11 / 13）	橋本 肇氏	40年の間に…
	亀ヶ谷純一氏	高齢者トレーニングに関する縦断的研究 —汎用性のあるトレーニング方法の確立を目指して—
第二回（12 / 11）	福山 勝也氏	分子の世界の“レゴ遊び” —超分子合成化学の魅力—

III. 教育活動

〈学内語学試験〉

	校舎	日付	受験者数	受験者合計
TOEIC IP 試験				
〈第一回〉	横浜	6 / 19 (水)	48名	134名
	白金	6 / 29 (土)	86名	
〈第二回〉	横浜	11 / 20 (水)	64名	175名
	白金	10 / 19 (土)	111名	
〈第三回〉	横浜	12 / 18 (水)	93名	205名
	白金	12 / 21 (土)	112名	
TOEFL ITP 試験				
〈第一回〉	横浜	6 / 26 (水)	70名	
〈第二回〉	横浜	10 / 2 (水)	98名	

<講座>

◆短期講座◆

講座名	校舎	曜時限	期間 (コマ数)	講師	受講者数
DELE 試験準備講座 <文法・語彙編>	白金	10:00～ 13:00	9 / 9～13 (全10コマ)	仲道慎治氏	9名
DELE 試験準備講座 <実践編>	白金	14:00～ 17:00	9 / 9～13 (全10コマ)	Eugenio del Prado氏	8名
DELE 試験準備講座 <文法・語彙編>	白金	10:00～ 13:00	3 / 10～14 (全10コマ)	仲道慎治氏	12名
DELE 試験準備講座 <実践編>	白金	14:00～ 17:00	3 / 10～14 (全10コマ)	Eugenio del Prado氏	10名
手話講座	白金	3・4限	3 / 10～14 (全10コマ)	荒木泉氏 長田静乃氏	入門編：24名 実践編：24名
ドイツ語技能検定試験 4級対策講座	横浜	水5	10 / 2～11 / 20 (全8コマ)	佐藤修司氏	6名

◆通年講座◆

DELE 準備講座	白金	水5	4 / 10～1 / 15 (全28コマ)	Eugenio del Prado氏	春：10名 秋：5名
ハングル能力検定試験 対策講座 (5級・4級)	横浜	火4	4 / 16～1 / 7 (全28コマ)	朴美恵氏	9名
ハングル能力検定試験 対策講座 (3級・4級)	白金	火2	10 / 1～1 / 7 (全14コマ)	李善姫氏	10名
中国語コミュニケーション・ 検定試験講座 (3級・4級)	白金	春：火4 秋：火4・5	4 / 9～1 / 7 (全42コマ)	鈴木健太郎氏	春：24名 秋：7名(4級) 6名(3級)
中国語コミュニケーション・ 検定試験講座 (3級・4級)	横浜	金4	4 / 19～7 / 19 (全12コマ)	竹中佐英子氏	5名
ドイツ語3級検定講座	白金	木5	4 / 11～1 / 9 (全28コマ)	小山田豊氏	9名

◆TOEIC 講座◆

<試験対策講座> 春学期	白金	土3・4	6 / 1～29 (全10コマ)	長谷川剛氏	14名
<試験対策講座> 秋学期	白金	土3・4	11 / 9～12 / 7 (全10コマ)	長谷川剛氏	24名
<夏季集中特訓講座> 基礎コース	横浜	2・3	8 / 26～9 / 3 (全14コマ)	中村道生氏	11名
<夏季集中特訓講座> 実践コース	白金	2・3	8 / 26～9 / 3 (全14コマ)	長谷川剛氏	17名
<春季集中特訓講座> 基礎コース	横浜	2・3	2 / 13～21 (全14コマ)	中村道生氏	13名
<春季集中特訓講座> 実践コース	白金	2・3	3 / 6～14 (全14コマ)	長谷川剛氏	21名

IV. その他

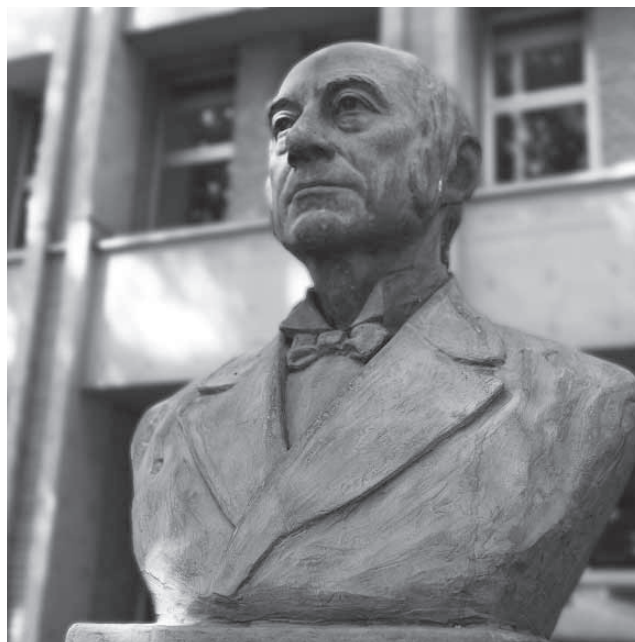
〈公開講演会〉

講座名	校舎	曜時限	期間（コマ数）	講師	受講者数
〈ヨガ〉外国語を通じて学ぶ日本の文化	横浜	4	5 / 22（水）	王飛氏	27名
〈茶道〉外国語を通じて学ぶ日本の文化	横浜	4	5 / 29（水）	大岩宗理氏	18名

〈刊行物〉

- ・ 明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報 『SYNTHESIS 2013』 3月発行

02 研究所活動



高齢者トレーニングに関する縦断的研究 —汎用性のあるトレーニング方法を目指して—

亀ヶ谷純一

本学の健康・スポーツ科学研究室では6年前より、港区チャレンジコミュニティー大学に講座を提供している。テーマは「高齢者の健康・体力づくり」で、専任教員が中心となりリレー講座として総合的な広がりを持たせながら講義を進めている。このテーマは世界で例を見ない高齢化社会になりつつある日本の喫緊の課題の一つである。

1. はじめに

健康を考える上でその指針となる考え方として「総合的なQOL」がある。それは経済力、精神的活力、健康的活力そしてライフスタイルなどによって成り立っている。今回の研究対象の高齢期の特徴を言うならば身体機能、立場や役割、人間関係などの喪失を経験する時期といえる。具体的には以下のような特徴を発現する。1、加齢に伴う身体的および機能の低下 2、社会的、経済的基盤の喪失ないし弱体化 3、心理的側面からは様々な喪失感によるうつ傾向 4、知的機能の加齢による低下、特に増加する痴呆 5、高齢者は複数の慢性疾患になっている場合が多く、その影響を受ける 6、疾患によって身体活動を大きく制限される場合がある。

2. 研究の目的

高齢者の筋力アップのためのトレーニングについて、その方法や時間的な制約などの様々な課題が残されている。特にマシンを用いたトレーニングは高齢者にとっては危険性もあり、実施する場合にはスポーツジムなど、特定の場所へ行くことが必要となり簡易的に行うことが難しい。また、これまでの研究結果は比較的短期間でのトレーニング効果について検討したものが多く、高齢者が長期的に行えるトレーニングであるかは不明である。

そこで本研究では、長期的なトレーニング実験の結果をもとに、高齢者が実施可能なトレーニングプログラムについて検討することを目的として研究を行った。

3. 研究の方法

被験者は77歳の健常な男性1名。調査期間は2009年から2013年までの4年間で、この間のトレーニングによる身体の変化について検討した。測定は都内にある大学の薬学部開催の健康教室および港区の健康増進センターで行い、測定データを収集した。測定項目は形態・身体組成・血圧（身長・体重・BMI・皮脂厚・腹囲・体脂肪率・基礎代謝量・血圧脈拍）、体力測定（上体起こし・垂直跳び・握力・全身反応時間・椅子の座り立ち・長座位体前屈・肺活量・最大酸素摂取量・10m障害物歩行・閉眼片足立）。

トレーニング内容は2009年から2011年までは週2回、リズム体操・マシントレーニング・エアロビクスを行う。この3年間は比較的運動負荷の高い運動を実施した。2012年から2013年にかけては、週3回に日数を増やし1日で行うトレーニング内容を減らした。

4. 高齢者の筋力に関するについての先行研究

加齢に伴う身体組成の変化は Wilmore ら (2008) により、加齢に伴い、体脂肪量は増加し除脂肪量 (筋量) は減少することが報告されている。加齢に伴う筋力の変化は Larsson (1979) 改変により、膝を伸ばす力が40代以降急激に変化することが報告されている。筋量低下の要因は多くの先行研究により40代を境に筋線維の狭小化と筋線維数の減少が顕著になることが分かっている。高齢者のトレーナビリティについて「筋の科学事典」福永哲夫 (2002) は、4種類のトレーニング、腕を曲げる (アームカール)、おもりを頭上に持ち上げる (ミリタリープレス)、脚を伸ばす (レッグプレス)、ベンチプレスを行いその筋力を測っている。その結果どの種目もトレーニング開始後、トレーニング期間の増加に伴い筋力が劇的に増加しており、高齢者であっても筋力アップすることが明らかになっている。

同様に高齢者 (60-80歳代) のトレーニング効果について Fiatarone (1990) はマシンによる8週間の膝伸展トレーニングの結果、筋断面積は14.5%、筋力 (1RM) は174%増加を、Roman (1993) はマシンによる12週間の肘屈曲トレーニングの結果筋堆積は14%、筋力は23-48%増加したと報告している。これらから高齢者であっても、筋力トレーニングは効果があるということが実証されている。

5. 結果と考察

2012年から2013年までの結果、体脂肪率とBMIは4年間で大きな変化はなかった。除脂肪量 (筋量) や脂肪量、基礎代謝量に大きな変化はなかった。筋力では上体起こしが2010年から2011年にかけて回数が増加している。最大酸素摂取量は2010年から2012年にかけて大きな変化はなかったが、2012年から2013年にかけて約36%の大幅な増加がみられた。この間のトレーニングメニューでの変化は新たに取り入れた60分のボイストレーニングのみである。

被験者は日頃からアウトドアスポーツに親しみ活動的な生活を送っている。主観ではあるが「2012年以前よりスキーや山登りが楽になった」と有酸素能力が向上したことを被験者自身も実感している。このことから考察するとボイストレーニングが最大酸素摂取量の増加につながっている可能性を排除することはできない。もしくはボイストレーニングで用いられる腹式呼吸による呼吸法が結果として有酸素能力向上に有効に作用していることも考えられる。

しかしながらボイストレーニングと最大酸素摂取量の因果関係は今回の測定データだけでは結論を出すに至らず、まだ不明である。腹式呼吸と有酸素能力の関係については今後の検討課題としたい。合わせて高齢者の有酸素能力向上のためのトレーニングとして呼吸法が有効であるとの示唆についても今後の研究を待ちたい。

分子の世界の“レゴ遊び”

—超分子合成化学の魅力—

福山 勝也

ブロック遊びで有名なLEGO（レゴ）は、様々な形状のピースを様々な組み合わせることにより、例えば“家”であったり“車”であったり、あるいは“動物”であったりと、全く異なる形状のものを、ある程度の制約の下で自在に作ることが可能である。化学合成も、フラスコやビーカーなどの中で様々な分子を組み合わせることで反応させることによって、形状、性質の全く異なる分子を作り出すものであることから、この“レゴ遊び”にも似た感覚があると言っても過言ではない。（もちろん、それなりに危険も伴う“遊び”ではあるが。）

実際、「分子の世界の“レゴ遊び”」とも言えるような、奇妙な構造を有する分子を合成する試みが数多くなされている。その代表例が“ナノキッド” [1] や“ナノカー” [2] である。“ナノキッド”は、分子式が $C_{39}H_{42}O_2$ で示される粘性のある黄色固体であるが、その構造式はまるで人が両手両脚を広げているようにも見えることから、そう呼ばれている。まさに身長約2 nmの“小人”である。また“ナノカー”は、髪の毛の太さのおよそ2万分の1の大きさの、文字通り“車”のような形状をしたもので、端の部分にサッカーボール状分子である“フラーレン”を4個結合させ、これを“タイヤ”に見立てている。しかもこの“車”は実際に金の表面をまっすぐに動くことが、走査型トンネル顕微鏡（STM）によって確認されている。

なお今回の発表の副題にもある超分子（supra molecule）とは、複数の分子が共有結合以外の弱い結合や比較的弱い分子間相互作用により秩序だって集合した化合物のことである。この超分子に分類される化合物の世界においても、例えば“ダンベル”のように両端が嵩高い形状をした棒状の分子の軸の部分に小さな“リング”状の分子を通し、その立体障害によって“リング”が抜けられないようにした形状の“ロタキサン” [3] や、5つの大きな環状の化合物が、まるでオリンピックのシンボルマークのように、潜って組み合わさった形状の“オリンピアダン” [4] など、奇妙な構造を有する分子を合成する試みが数多くなされている。

筆者は昨年度の在外研究において、自身のこれまでの研究テーマである多孔質炭素材料の細孔構造解析にも関連して、細孔の内外で親水性・疎水性が制御された新奇な多孔質炭素材料を志向した大環状超分子化合物の合成を試みることにした。

まず“Friedel-Crafts アシル化反応”により、1,3-ジメトキシベンゼン1分子に対して塩化ベンゾイル2分子を作用させて、4,6-ジベンゾイルレゾルシノールを得た（図1）。ここで得られた4,6-

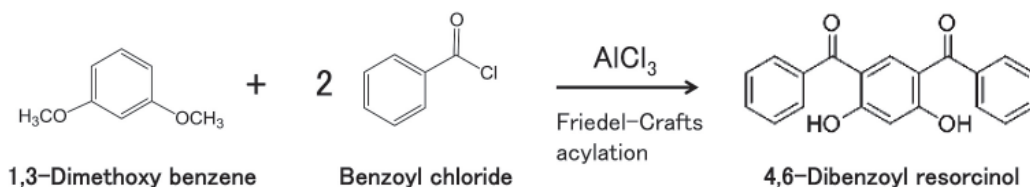


図1 Friedel-Crafts アシル化反応による4,6-ジベンゾイルレゾルシノールの合成

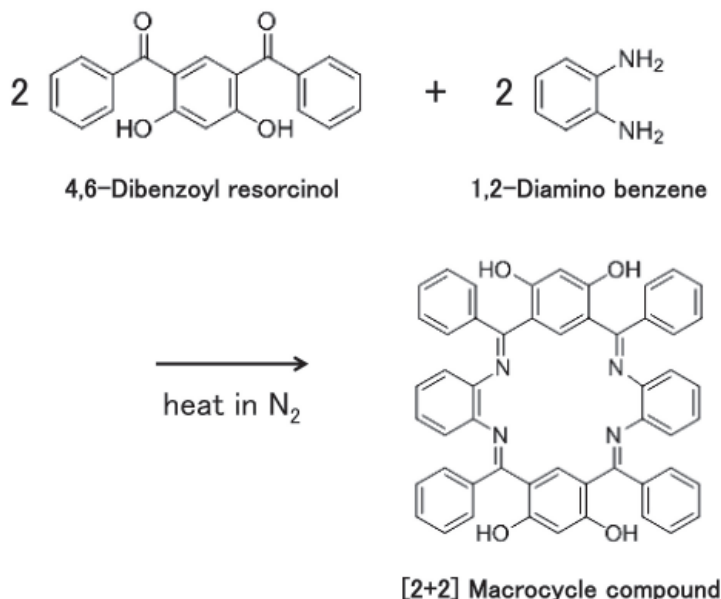


図2 シッフ塩基 [2+2] 大環状化合物合成の試み

ジベンゾイルレゾルシノール2分子に対して1,2-ジアミノベンゼンを2分子作用させて、シッフ塩基（イミン）の [2+2] 大環状化合物を合成することを試みた（図2）。しかし、様々な反応条件を検討しながら合成を試みたものの、残念ながら目的の大環状化合物を得るには至らなかった。1,2-ジアミノベンゼンで環化させるのは立体化学的に“窮屈”である可能性もあり、今後は1,2-ジアミノベンゼンを1,3-ジアミノベンゼンに換えて、より大きな

環を有する [3+3] の大環状化合物の合成を試みる予定である。また、細孔の内外の親水性・疎水性を制御する目的から、環の外側の疎水性をより高めるために、1,3-ジメトキシベンゼンのかわりにベンゼンなどを用いた合成もあわせて試みることにしている。

ところで、このシッフ塩基大環状化合物の合成を行う過程で行った核磁気共鳴（ $^1\text{H-NMR}$ ）測定において、ベンゼン環の2つの水酸基（OH）に挟まれた部位の水素原子（H）のシグナルだけが、時間とともに徐々に減衰するという挙動が確認された。質量分析を行ったところ、この減衰挙動は、 $^1\text{H-NMR}$ 測定の際に用いる「重水素化溶媒」のもつ重水素原子（質量数2の水素原子のことで、Dと表記）との間でC-H / C-D交換が起きていることで生じていることが示唆された。一般にベンゼン環の水素原子におけるC-H / C-D交換は、高温条件での反応や貴金属触媒の存在下で生じることが知られており [5-7]、今回のように貴金属触媒が不要で、しかも室温条件において、単に重水素化溶媒に溶解しただけで交換反応を生じることが示されたことは、極めて興味深い。ここで、得られた結果の一例を図3に示す。NMRチューブに2,4,6-トリヒドロキシベンズアルデヒドを入れ、これにエタノールアミンを触媒量加え、さらに重水素化したメタノール（ CD_3OD ）を加えて溶解させたところ、ベンゼン環がもつ3つの水酸基（OH）にそれぞれ挟まれた2つの水素原子（Hb）においてC-H / C-D交換が起こることが確認され、その半減期は33時間であると見積もられた。また、エタノールアミンを加えずに重水素化メタノールと重水（ D_2O ）を体積比1:1で混

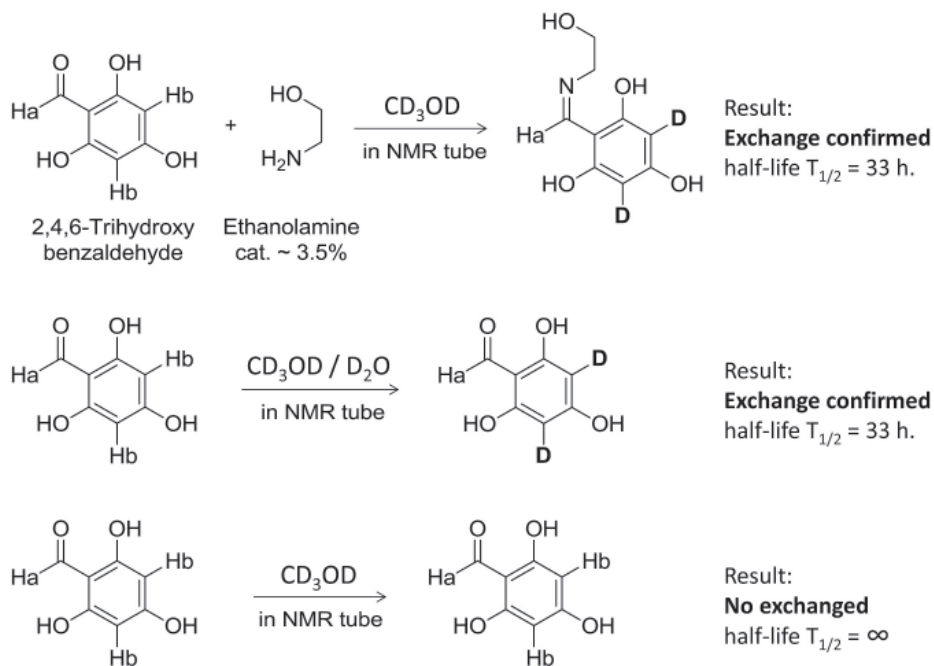


図3 2,4,6-トリヒドロキシベンズアルデヒドのC-H / C-D交換反応

合した溶媒中に2,4,6-トリヒドロキシベンズアルデヒドを溶解させたところ、同様にC-H / C-D交換が起こることが確認され、その半減期は同じく33時間であると見積もられた。一方、2,4,6-トリヒドロキシベンズアルデヒドを重水素化メタノールだけに溶解させた場合、C-H / C-D交換は確認されなかった。このことから、2,4,6-トリヒドロキシベンズアルデヒドにおいてC-H / C-D交換を生じるためには、重水素化メタノールだけでなくアミン（エタノールアミン）と反応させてシッフ塩基（イミン）とするか、あるいは重水素化メタノールと重水の混合物を用いるかのどちらかが必要であることが明らかとなった。また、水酸基（OH）とメトキシ基（OCH₃）に挟まれた水素原子や、2つのメトキシ基に挟まれた水素原子ではいずれもC-H / C-D交換が起こらないこともあわせて確認しており、現在このメカニズムについて考察しているところである。

文献

- [1] Chanteau, S. H.; Tour, J. M. *J. Org. Chem.* **2003**, 68, 8750.
- [2] Shirai, Y.; Osgood, A. J.; Zhao, Y.; Kelly, K. F.; Tour, J. M. *Nano Lett.* **2005**, 5, 2330-2334.
- [3] Harrison, I. T.; Harrison, S. *J. Am. Chem. Soc.* **1967**, 89, 5723-5724.

- [4] Amabilino, D. B.; Ashton, P. R.; Reder, A. S.; Spencer, N.; Stoddart, J. F. *Angew. Chem., Int. Ed. Engl.* **1994**, 33, 1286-1290.
- [5] Gerhards, M.; Unterberg, C.; Schumm, S. *J. Chem. Phys.* **1999**, 111, 7966-7975.
- [6] Price, D.; Dawkins, J. V.; Higgins, J. S. *Int. J. Polym. Anal. Charact.* **2000**, 6, 1-11.
- [7] Ito, N.; Esaki, H.; Maesawa, T.; Imamiya, E.; Maegawa, T.; Sajiki, H. *Bull. Chem. Soc. Jpn.* **2008**, 81, 278-286.

2013年度ランゲージ・ラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージ・ラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在では、英語はILSSP (Independent Language Study Support Program) を解説し、自習者自らが具体的な目的を設定し、その目的に向かって定期的にチューターと面談しながら学習するプログラムを展開し、自律学習実践の手助けを行っている。

英語以外の外国語では、言語ごとに曜日、時限を決めてネイティブスピーカーの会話実践の場、オンラインによる学習援助の場を提供したり、日頃の学習の補足を行ったりしている。

今年度は図書館リブラが開設され、月曜日（韓国語）、火曜日・金曜日（スペイン語＋英語、中国語＋英語）には、自由な会話スペースとして、留学生の方々、非常勤の先生にお願いし、フリートークの時間をもうけ、学生の動機付けの向上を目指した活動を行ってきた。

以上のように、各外国語がそれぞれ独自の事情を考慮しておこなっている。今後は自律学習の内容についてもチェックし、より効率的な学習についてのアドバイスを行っていくことが課題となるう。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：仁科恭徳

英語部門では、昨年度に引き続き、英語の自律学習を一学期間のわたってサポートする Independent Language Study Support Program (ILSSP) と、お昼休みに英語の学術的な講義を聴講する Luncheon Lecture Series、そして TOEIC オンラインコースを主要な活動の基軸として実施した。

まず、毎年度、参加した学生から高い評価を得てきた ILSSP は、今年度も春学期と秋学期の二期に渡り実施した。毎週月曜日の 12:30 - 15:30 をコーディネーターの升井裕子氏（本学非常勤講師）が担当し、毎週木曜日の 12:30 - 15:30 をコーディネーターの坂井誠氏（本学非常勤講師）が担当した。各学生が設定した学習目標を達成すべく、ポートフォリオを活用して自律学習に励ませた。学生の選抜方法は、従来通りオリエンテーションを行い、募集と選抜を行った。採用予定人数を大幅に超える多くの応募があったことから、登録希望者に英語学習に対する熱意を調査用紙に記入してもらい、その内容を勘案した上で選抜した。各学期の参加者数の詳細は表1のとおりである。

表1 ILSSSP実績

実施期間	参加者数
春学期（5月－7月）	21名 [文学部5、経済学部6、社会学部1、法学部1、国際学部7、心理学部1]
秋学期（10月－1月）	18名 [文学部3、経済学部2、国際学部10、社会学部3]

ILSSSPの事後アンケート調査の結果においても、学生にとってその内容は満足のいくものであることが分かった。

また、ランチタイムに英語でレクチャーを行う Luncheon Lecture Series を、今年度は全6回開催した。各回の詳細は表2のとおりである。ほぼ月1回のペースで、様々なテーマについて分かりやすくレクチャーがなされ、お昼休みという短時間で、学生が各テーマの面白さに触れることができた。このランチオン・レクチャーの構成や講演者のプレゼンテーション技術を目にしておけば、いつか留学した際、人前での発表時に活かせる可能性がある。今年度は昨年度に比べ、多数の学生が参加した。英語を聴くためのモチベーションが高い学生が増えているようだ。来年は、学生が気軽に質問できるような双方向的なレクチャーを目指す。

表2 Luncheon Lecture Series 実績

	日付	タイトル	講演者	参加者数
第1回	5/27	Talking about TOEFL	William Twaddell (本学非常勤講師)	86名
第2回	6/13	Blown Away: Adrift, rescue, and return in 1610 and 1822	Patricia Yarrow (本学非常勤講師)	126名
第3回	7/4	Medieval European Martial Arts Today	Dax Thomas (本学非常勤講師)	128名
第4回	10/14	Music, Sound, and English	Trazi Williams (本学非常勤講師)	89名
第5回	11/5	Multiculturalism and Identity in Canada	Aya Iino (本学非常勤講師)	89名
第6回	12/5	"There is nothing to fear but fear itself"	Aviva Ueno (本学非常勤講師)	109名

2.2 ドイツ語部門：吉田 真（経済学部）

「ドイツ語deランチ」と題して、野端聡美氏（本学非常勤講師）が毎週水曜日の昼休みに行なった。参加人数は年間を通して10名程度であった。参加者は1名のみドイツ語未習者であり、他はドイツ語を履修している1年生と2年生であった。2年生のほとんどは去年から引き続き「ドイツ語deランチ」に参加している。

春秋両学期を通して、ドイツ語の聞き取り練習を多く行なった。春学期はイギリスの語学テレビ

番組「Extr@ auf Deutsch」の初級編と、ドイツの子供用アニメシリーズ「Janoschs Traumstunde」を教材として扱った。あらかじめ聞き取る文章を書き出し、重要な単語や言い回しのみを空欄にして聞き取ってもらった。秋学期は日本をテーマにしたドイツ語のニュースの聞き取りに挑戦した。「2020年東京オリンピック開催決定」や「福島原発汚染水問題」など、普段よく耳にするニュースを題材にすることで、理解を容易にすると共に「ドイツでは日本についてどのように報道されているか」を考えることを狙いとした。聞き取りの際は、前年度からの参加者がリードする形で皆積極的に発言していた。

そのほか、ドイツ人留学生にドイツでの大学生活について話を聞いたり、ドイツの行事についてクイズを行ったりと、文化への理解を深める機会も設けた。

2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、ランゲージ라운ジのスペースの利用、時間帯等を考慮して、自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、セルバンテス文化センターが提供しているAVE (Aula Virtual de Español) への受講によって自律学習を促している。春学期、秋学期にそれぞれ20名程度が受講し、そのうち7割程度が初級レベル、3割程度が中級レベルで勉強を続けている。この講座では、予め様々な学習教材が用意され、学習者が自由にページにアクセスして学習する方法になっている。その内容、学習者のコミュニケーション能力の向上をめざすためにこのコースを利用するにはどうしたらよいか。定期的にコースにアクセスさせるようにするための工夫をどうするかなどが課題である。また、これらのコースとDELE準備講座との連携などをすすめ、DELE講座でしっかりした成果をあげていくことも検討課題である。

2.4 中国語部門：張宏波

2013年度の中国語部門「中文会話倶楽部」は、昨年度に引き続き、授業期間中の毎週木曜日に開催した。今年度は初めての試みとして、学生と同世代の中国人留学生に担当してもらい、日本人学習者と留学生とが<協同学習>を行うことで、中国語学習の効果を高める場となることを企図した。

中国語履修者といえども中国人留学生の友人がいる学生は多くはない。語学学習だけでなく、留学生と学生らしい日常的な交流をすることで、中国語話者や中国語圏への理解を深め、学習意欲が刺激された日本人学生が少なくなかったことは、一定の成果であった。

また、担当を務めた中国人留学生以外にも、日本人学生との交流を求める多くの留学生が参加してくれたことも、今後の展開を考える上で重要な点だった。留学生と日本人学生が集って相互理解を深め合うこと自体が<協同学習>であり、<異文化体験>でもある。語学学習の前提として、日本人が中国語話者に興味を持つことは、学習意欲を高め、目標を見出させることに繋がる。留学生

にとって日本人学生と交流することは、日本社会への理解を深める機会となる。こうした相互交流をさらに深めていく「場」として、今後の倶楽部をどう展開すべきか考えていきたい。

ただ、このような場があることの認知度がまだ低いようなので、告知の方法を検討しなければと考えている。図書館1階の交流スペースを利用していた今年度当初は、目立つ場であったため学生が気軽に立ち寄る光景がみられたが、ランゲージラウンジだけに使える場ではないため、途中から1号館3階の教室へと移動して実施した。オープン・スペースから建物の中に入ってしまうと、楽しそうな交流の場に惹き付けられて学生が立ち寄るという可能性が小さくなってしまう。多くの学生に「倶楽部」を認知してもらえるような場を探すことも今後の課題といえる。

2.5 韓国語部門：金珍娥

2013年度韓国語ランゲージ・ラウンジにおいては、横浜校舎と白金校舎で、以下のような日程と体制で、韓国語自由会話を中心に週1回実施した：

●横浜校舎

担当講師：高槿旭（コグヌク）

実施期間：春学期 2013年4月16日～7月16日（毎週火曜日）

秋学期 2013年9月24日～12月24日，2014年1月7日（毎週火曜日）

教 室：明治学院大学横浜校舎 424教室

時 間：12時35分～13時20分

人 数：5～7人

担当講師の高槿旭先生から全体的に以下のようなことが伝えられた：

春学期には中級レベルの文法形式を用い、会話練習を中心に行った。

秋学期には様々なテーマを提示、その関連語彙と文法形式を確認して、ペアで会話を作るロールプレイを中心に行った。韓国に留学に行ってきた学生も多かったので、日韓の日常生活などの違いについて、話すことも多かった。

去年から参加している学生が多く、基本的な文法内容に加えて、語彙力の強化と話す能力を高めることを一つの目標にした。去年に比べ、日本語を使う時間が圧倒的に少なくなり、学生たちも韓国語に自信が付いた様子で、積極的に話してくれた。受講者の成長が実感できる時間であった。

●白金校舎

担当講師：李善姫（イソニ）

実施期間：秋学期 2013年10月1日～2014年1月7日（毎週火曜日）

教室：明治学院大学白金校舎 1352教室

時間：3時限目（13時25分～14時55分）

人数：5～6人

担当講師の李善姫先生から全体的に以下のようなことが伝えられた：

毎回、韓国のお正月やお盆の過ごし方、慣習やしきたりなど、韓国の伝統文化や現在の社会や流行をテーマに授業を行った。授業は、①各テーマに関する資料を配り、関連表現と韓国文化を学び、②日本の文化との違いを自由に会話する、という形式で行った。

少人数のアットホームな雰囲気、全員授業に積極的に参加し、自由に話すとても楽しい授業だった。韓国語を通じて韓国の文化にも触れることができ、学生がとても喜んだ。中級～上級レベルの学生が参加し、授業を重ねる毎に上達が見え、後半はかなりハイレベルな会話ができ、教える側としてもとてもやりがいのある楽しい授業であった。

03 研究所プロジェクト



生活習慣が青少年の 健康状況・身体特性に及ぼす影響

越智 英輔・福山 勝也・森田 恭光

本研究は、生活習慣（運動環境を含む）が異なる青少年を対象とし防衛体力および身体組成（骨・筋・脂肪）を調査検討することを目的とした。実験1では、大学生を対象とした減量下における防衛体力の変化について検討した。実験2では、小学生への調査を実施した。本稿では、実験1の一部を報告する。

<実験1>

大学男子柔道選手における試合前の減量についての実態調査

【背景・目的】

近年、オリンピック競技として世界200ヶ国に広まっている柔道競技は、下半身への直接攻撃の禁止や抑込技の時間短縮など様々なルール改正が行われている。その中でも試合前における計量日時の変更は、選手のコンディションづくりに大きな影響を及ぼすものとして注目されている。柔道競技は、もともと当日の朝に計量を行うことが多く、前日計量を主としているレスリングやボクシングなどの階級制競技とは異なるものである。しかしながら、今回のルール改正に伴い柔道競技においても前日計量の制度が導入されることとなった。現在、国内大会での前日計量は、移行期間として主要な大会においてのみ実施されており、今回調査を行った試合は、学生の全国大会として初めて前日計量が導入されることになった大会である。

一方、柔道競技における減量を含むコンディショニングの研究は数多く行われている。柔道選手の減量の実態調査として血液や栄養摂取の状況を報告したものや、レスリング競技との比較において、柔道選手のほうがレスリング選手よりも減量体重が少なく、長い時間をかけて減量を実施しているという報告などが見られる。しかし、柔道競技における前日計量に対するコンディショニングを報告したものはほとんど見られない。

そこで本研究は、非侵襲的な測定項目を用いて、前日計量を導入した試合の大学男子柔道選手における試合3週間前（減量前）と試合直前（減量後）の実態調査をすることによりコンディションづくりの一助とすることを目的とした。

【方法】

減量を必要とする健康な大学男子柔道選手9名を対象者として測定を行った。測定項目は、身体組成（体重、体脂肪率）、唾液採取（SIgA、コルチゾール）、Profile of mood states（POMS）である。身体組成は、TANITA社製MC-190による多周波インピーダンス法を用いて測定を行った。唾液採取は、一般的な方法であるサリベット（Salivette, Sarstedt社製）を用いて行った。コットン部分を毎秒一回の割合で1分間咀嚼させた後、直ちに4℃に設定した遠心分離器を用いて3000rpmで5分間遠心分離して試料を得た。SIgA、コルチゾールは酵素免疫測定により評価した。

心理的観察の尺度であるPOMSは、同様の効果が得られる短縮版による調査を実施し、怒り・疲労・緊張・情緒混乱・抑うつ・活動性の6因子を用いた。統計解析については、すべての数値を平均値±標準偏差で表し、測定値は減量前後で対応のあるt検定を行い有意水準を5%未満とした。

【結果・考察】

対象者9名の体重は、減量前83.3±17.1kg、減量後79.4±16.7kgであった。また、体脂肪率は、減量前15.7±6.3%、減量後12.6±6.8%であった。体重、体脂肪率ともに減量前と比較して減量後における数値の方が有意に低い値を示した ($p < 0.01$)。唾液採取における減量前のSIgA濃度は78.0±51.0 $\mu\text{g/mL}$ であり、減量後のSIgA濃度は67.0±33.0 $\mu\text{g/mL}$ であった。また、コルチゾール濃度は、減量前0.36±0.13 $\mu\text{g/mL}$ 、減量後0.30±0.20 $\mu\text{g/mL}$ であった。減量前後におけるSIgA濃度およびコルチゾール濃度の値について統計学的に有意な差は認められなかった。POMSの結果は、疲労の項目において、減量後の方が減量前より有意に低い値を示した ($p < 0.01$)。以上より、我々は試合に向けた体重、体脂肪率の減少、唾液採取による指標における数値の実態、主観的疲労の軽減を明らかにすることができた。これらの結果は、試合前のテーパリングやボディメンテナンスが適切に実施されたことを示唆する。

「教養教育としてのカフェ」研究： カフェ・ネットワークの構築とその意義 中間報告

プロジェクト長：猪瀬 浩平

プロジェクトメンバー：植木 献・上野 寛子・三角 明子

1. 研究目的

教養教育において、パラダイムの再構築は重要な課題の一つである。学習者が課題を発見し、問題解決の方法を探求するには、これまで依拠してきた既存のパラダイムを捨て、新たなパラダイムを構築する必要に迫られることがしばしばある。高等教育に初めて触れる学習者にとって、それは知的・人格的に大きく成長する契機となるが、他方これまでの常識や価値観を否定することにもなり、日常生活にも少なからぬ影響がある。

問題解決のため不安定になりがちな学習者は、課題を共有する仲間と出会い、議論することを通して、価値観の再構築にじっくり取り組むことが可能になるのではないかと。

この研究プロジェクトでは、授業時間外で学習者が自由に議論し、課題を発見・解決するための場（カフェ）をキャンパス内外にいかにつくられるかを探求する。明治学院内部ではすでに学問分野ごとや、教員の個人的な取り組みなどで、こうした様々な活動が行われており、それぞれ個別の成果を上げているが、これらの場を横断的に結びつける活動は行われてこなかった。問題意識を持つ学習者にこうした様々な場があることを組織的に知らせ、有機的に場を結びつけていく方法を模索する。

2. 研究活動

2-1 猪瀬企画

1) 郡上おどりin戸塚

民俗芸能を介して、その担い手、学生、そして学外の人々との間に、これまでなかったコミュニケーションを生み出すことを目的とする。

実施日：2013年5月25日

会場：横浜校舎8号館インターナショナルラウンジ&善了寺

本年度は戸塚まつりにおいて、郡上おどりを通じたトークライブとワークショップ、そして踊りの実演を行った。例年どおりゲストには郡上出身の若手御囃子グループ「郡上舞紫」をお招きした。新たな試みとして、国際学部の協力をうけながら、インターナショナルラウンジで多言語郡上おどり講座を開催した。ゲストのおどりや郡上の文化・歴史についての説明を、本学学生が英語や中国語に通訳し、日本語学校の学生や留学生から多数の参加が見られた。終了後、矢部町の善了寺に移動し、郡上おどりの実演を行った。5年目の恒例行事となり、初めて200人を超える参加者が見られた。

このように、今年度の特色は、民俗芸能学習と、外国語や異文化学習を組み合わせさせた点にあった。

2) ワークショップ「屋台という回路」

実施日：2013年11月27日

実施場所：横浜校舎内各地

メディアとしての屋台を武器に鳥取のまちづくり（空洞化する中心市街地の活性化や、多様な人々によるコミュニティの創造）を画策する若者集団「鳥取大学屋台部」をゲストスピーカーに、実践報告を行うとともに、横浜キャンパスで屋台と大学、屋台を介した人と人の間に生まれる化学反応が如何なるものになるのか実験を行った。

当日はゲストによる講演の後、遠望橋上に屋台を設置し、公開読書会を行った。通りすがりの学生が参加するだけでなく、教員や職員の参加も見られた。普段は教室で行われていることが外から見えない中で、この実験により授業公開のひとつの可能性が示される結果となった。なお次年度に向けて、本格的な屋台づくりが検討されている。

2-2 上野企画

上野企画

- 1) 学生生活型カフェ第1弾「知らなきゃ損！大学生の基礎知識」（5月20日）を8号館インターナショナルラウンジにて実施

高校と大学の違い、大学って何ですか、大学の授業や大学のしくみなどについて、意外と知られていない基礎知識（＝常識）を解説し、学生が日頃抱いている些細な疑問から大きな悩みまで情報を共有し、みんなで解決していくワークショップを実施した。40名以上の学生が参加し、大半が1年生であった。1年生にとって新学期が始まってまだまだ不安を感じる2か月目に本企画を開催したことは大変有意義であった。

- 2) 学生生活型カフェ第2弾「即トレ！メンタル・ブートキャンプ」（6月24日）を8号館インターナショナルラウンジにて実施

メンタルを鍛えることは対人関係を良好にしたり、就職活動を含め今後の社会活動の糧にもなる。「自尊心」を高め、「ストレスマネジメント」の仕方を学ぶことにより、メンタルを鍛える方法を体験的に習得した。本企画には30名近くの学生が参加した。

- 3) 学生生活型カフェ第3弾「SST：ソーシャル・スキル・トレーニング」（10月14日）を8号館インターナショナルラウンジにて実施

植木先生から「Non verbal communication：言葉を使わずに私たちはどこまで自分について

伝え、相手について知ることが出来るのか」についてトレーニングを受けた後、仁科先生が認知心理学の成果を紹介、最後にVerden先生から異文化コミュニケーションについて学び、コミュニケーション力UPに必要なスキルを身につけた。本企画には20名を超える学生が参加した。

4) 公開ワークショップ「働くこと、生きることについて考える」(11月14日)を720教室にて実施

NPO法人Future Dream Achievement 事務局長の成澤俊輔氏の指示に従い、300名を超える学生が他者を意識し、他者を想い、他者の存在により「自分」の存在を確かめることを体験した。成澤氏は数年前に視力を失った視覚障がい者であるが、これまでの人生から得たエッセンスがうまく組み込まれ、一つ一つの言葉が心に刻まれ、涙する学生がでるほど感動する時間であった。

5) 学生活性型カフェ第4弾「76,800時間を、あなたはどのように使いますか?」(11月29日)を8号館インターナショナルラウンジにて実施

まず、私から就職活動の現状や働き方の変容などの現代社会における基礎知識を提供した。次に、学業と両立しながらフリーランスディレクターとしてCSV事業のプランニングを行っている牛山翔太氏(本学国際学科4年)をゲストに迎え、不安定な時代の働き方について話題提供を行った。最後に、「働く」をテーマに参加者の悩みに答えた(参加者15名超)。

※76,800時間。1日8時間、週休2日で40年働いた時のおおよその労働時間。

6) ダイバーシティカフェ「誰も教えてくれなかった夢の描き方～出会いで変わった挑戦者たち～」(12月20日)を8号館インターナショナルラウンジにて実施

社会に出ると様々な人や様々な状況に遭遇する。困難な状況を乗り越え自分の人生を切り拓こうと挑戦し続けている方々(就労困難者)と積極的に交流するカフェ。まず、成澤俊輔氏(NPO法人FDA理事)が「日本における就労困難者の現状」について紹介し、次に、坂田浩次氏(NPO法人FDA)が就労困難者(さまざまな障がい者を含む)4名を紹介しながら、「就労困難者が抱える過去・現在・未来」について語り、その後、パネリストと学生が交流した。15名超の参加者とともに、実生活、実社会で出会う多様な人を知ることで、固定観念、偏見から自分を解き放ち、自分の将来やこれまでの人生について考えを深める時間となった。

2-3 植木企画

朝カフェ

横浜学生課、横浜図書館との共催で、朝7時半から9時までの90分を使い、一日を有意義に過ごせる朝カフェ企画を行った。パン、コーヒーで空腹を満たし、新聞・書籍を読んで討論して

から、1限に向かうというフレッシュな一日をスタートするための企画である。

実施日：11月14日（木）、11月28日（木）、1月15日（水）[予定]

会 場：横浜図書館りぶら 定員20名

当初は朝ごはん目当てに参加する学生が多いと予想していたが、むしろ一日を充実させたい、今の生活を何か変えるきっかけが欲しいという意欲的な学生が多く集まる結果となった。

近年、島根大学や立命館大学などでは朝食提供プログラムによって、学生の食生活改善と授業参加の促しに一定の効果を上げている。朝カフェはそれに刺激を受けての発案だが、出席や栄養面だけではなく、所属学科やサークルと言った日常的な枠組みから自由で知的な刺激をより多くの学生が共有することを目的とする。

第一回、第二回は参加の敷居を低くするため、その日の朝刊2紙を読み比べ、気になった記事を報告し合い、グループディスカッションを行う企画とした。また第三回ではブック交換¹という本の紹介を行うプログラムを実施する予定である。

今年度は試験的な実施にとどまるが、新入生の学習意欲向上や知的な刺激のコミュニティ形成という目的を考えると春学期の早い段階からの定期開催が望ましい。春学期からの定期開催を目標に今年度3回の実施結果を精査し、次年度の準備をしていきたい。

3. 今後の展望

本年度各企画に、企画者以外のメンバーも可能限り参加してきた。これまで行ってきたプロジェクトが如何なる成果を上げてきたのかを整理し、他大学で行われているカフェプロジェクトの事例比較などを行い、大学における新たな教養教育のスタイルとして提案していきたい。

1 2010年2月5日から始まり、フィレンツェ、ロサンゼルス、北海道から沖縄まで25都市で開催されている本の交換会のこと。決められたテーマに合った本を持参して、自己紹介をかねた本の紹介をした後は、本の交換をするといういたってシンプルなコミュニケーション型ブックトークイベント。日本国内や海外のブックカフェ、BAR、図書館、学校などで絶賛開催中。本を通じて参加者の人柄を知る絶好のチャンスになることから、新しい企業内研修や書店内のコミュニケーションツールとしても注目されている。http://bukubuku.net/?page_id=62

腱組織の力学的特性の新たな計測方法の開発

黒川 貞生, 亀ヶ谷 純一, 佐久間 淳 (武蔵丘短期大学),
edro Valadao, Avela Janne,

Taija Finni (Neuromuscular Research Center, Department of Biology of Physical Activity,
University of Jyväskylä)

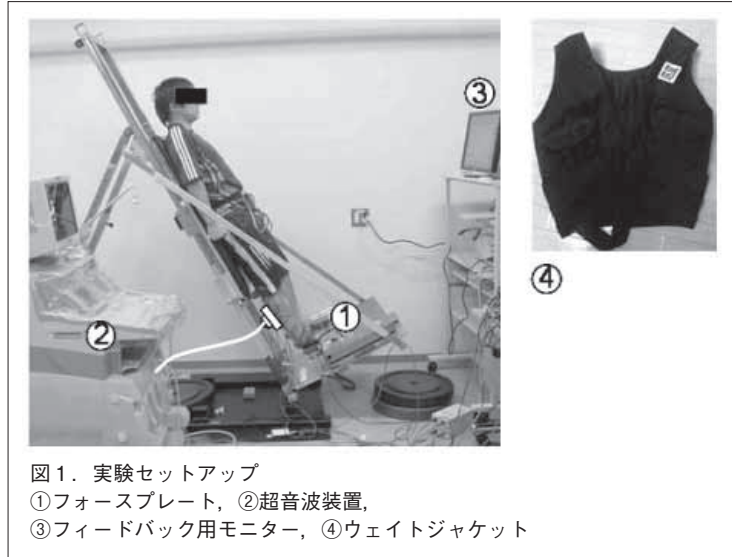
【目的】

腱組織は弾性を有しており、腱に張力が加えられたり、取り除かれたりするときに、弾性エネルギーが蓄積したり、リリースされたりする。この弾性エネルギーの大きさは、腱組織のstiffnessによって決定される。骨格筋では、筋線維は腱組織を介して骨に付着する。従って、これまで多くの研究で、腱組織は筋線維に直列に結合したバネとしてモデル化されてきた。近年、ジャンプ動作のような爆発的な運動の踏切局面の前半で腱組織に弾性エネルギーが蓄積され、後半のより短い時間でそれがリリースされること、そのエネルギーの大きさが筋・腱複合体の(MTU)が成した仕事の大部分であることが明らかにされた(Kurokawa, et al., 2001, 2003)。

一方、動物の摘出筋を用いた先行研究によると、任意の腱張力に対する腱組織(とりわけ腱膜)の伸張はかなり小さいことが報告されている。つまり、腱組織のstiffnessはpassive stretchに比べてactive stretchでより大きいことが報告されている(Ettema & Huijing, 1989, Lieber et al., 2000, Zuurbier et al., 1994)。これらの研究は、腱組織が筋線維に直列に繋がった単純なバネではないことを示唆している。近年、Azizi & Robert (2009)は、筋収縮中に腱膜が横方向にストレッチされることを明らかにし、筋収縮中に腱膜が縦・横両方向に伸張されることが縦方向のstiffnessを増加させ、このことがpassive stretchに比べてactive stretchで腱組織のstiffnessが大きいことを示唆した。このような現象はヒト腱膜でも観察されている(Maganaris et al., 2001, Muraoka et al., 2003, Finni et al., 2003)。また、腱膜の横方向の変形は筋線維の長さに依存し(Muraoka et al., 2003)、筋線維の長さは筋張力に依存する(Ito et al., 1998)ことが報告されている。

このような先行研究の結果からすると、ヒト腱組織において、passive stretchによって得られた力-伸張関係は腱膜の横方向の変形のない条件での腱組織の力学的特性を反映していると推測できる。また、active stretchによって得られた力-長さ関係は腱膜の縦・横方向の変形を含んだ条件での力学的特性を反映し、且つ、そのstiffnessは、力発揮レベルに依存すると考えられる。

Sugisakiら(2011)は同様の観点から、ヒトのアキレス腱組織の力学的特性を、ダイナモメータを用いて、検討した。しかし、ヒトのより自然な運動を用いて、腱組織の力学的特性を検討した研究は我々の知る限り存在しない。そこで、本研究では、スレッジを用いて、activeおよびpassiveな条件で、足関節背屈動作中のヒトのアキレス腱組織の力学的特性を検討することを目的とした。



【実験方法】

成人男性5名（年齢：26±3歳，身長：173±6cm，68±7kg）の下腿三頭筋腱を被験筋とした。用いる負荷を設定するために，まず，ダイナモメータにて足関節底屈の最大筋力を計測し，足長で除すことにより，その時のアキレス腱最大張力を算出した。算出した最大腱張力の20，40，60，80%に相当する負荷を算出した。それらの負荷は，ウェイトトレーニング用のプレートおよびウェイトジャケットを各々スレッジ装置（傾斜角45度）および被検者に付けることにより与えられた。これらの実験は，上下にスライドするスレッジ装置（傾斜角45度）を用い，被検者の膝関節を伸展させ，仰臥位にて行った。床面に設置されたフォースプレート上に固定された木製のブロックに被験脚の拇指球をのせ，足関節をpassiveおよびactiveに背屈させた。その際，床反力をフォースプレートより，腓腹筋およびヒラメ筋の筋活動を表面筋電図により計測した。同時に，超音波装置を用いて腓腹筋内側頭およびヒラメ筋の筋束を撮像した。また，足部の動きは側方よりビデオカメラにて被験脚を撮影し，下腿長変化を計測した。これらの全てのデータは同期して収録した。

【実験結果】

ダイナモメータで測定した最大筋力発揮時の足関節底屈トルクは181±13Nmであり，各被験者のモーメントアームで除したアキレス腱張力は1313±81Nであった。体重分を考慮すると，身体にかけるべき最大負荷は1390±103Nとなった。最大負荷では，被験者の足関節に痛みがあること等により，最大アキレス腱張力の20，60，80%の負荷で試行を実施することにした。各

条件におけるアキレス腱組織の伸張量については、超音波画像を分析することにより、算出中である。併せて、被検者数を2名追加し、同様の実験を計画中である。

【参考文献】

- Azizi, E & Roberts, T.J., 2009. Biaxial strain and variable stiffness in aponeuroses. *J Physiol* 587, 4309-4318.
- Ettema, G.J., & Huijing P.A., 1989. Properties of the tendinous structures and series elastic component of EDL muscle-tendon complex of the rat. *J Biomech* 22, 1209-1215.
- Finni, T., Hodgson, J.A., Lai, A.M., Edgerton, V.R., Sinha, S., 2003. Nonuniform strain of human soleus aponeurosis-tendon complex during submaximal voluntary contractions in vivo. *J Appl Physiol* 95, 829-837.
- Ito, M. Kawakami, Y., Ichinose, Y., Fukashiro, S. Fukunaga, T., 1998. Nonisometric behavior of fascicles during isometric contraction of a human muscle. *J Appl Physiol* 85, 1230-1235.
- Kurokawa, S., Fukunaga, T., Fukashiro, S., 2001. Behavior of fascicles and tendinous structures of human gastrocnemius during vertical jumping. *J Appl Physiol* 90, 1349-1358.
- Kurokawa, S., Fukunaga, T., Fukashiro, S., 2003. Interaction between fascicles and tendinous structures during counter movement jumping investigated in vivo. *J Appl Physiol* 95, 2306-2314.
- Lieber, R.L., Leonard, M.E., Brown-Maupin, C.G., 2000. Effects of muscle contraction on the load-strain properties of frog aponeurosis and tendon. *Cell Tissue Organs* 166, 48-54.
- Maganaris, C.N., Kawakami, Y., Fukunaga, T., 2001. Change in aponeurotic dimensions upon muscle shortening: in vivo observation in man. *J Anatomy* 199, 449-456.
- Muraoka, T., Muramatsu, T., Kanehisa, H., Fukunaga, T., 2003. Transverse strain of aponeurosis in human tibialis anterior muscle at rest and during contraction at different joint angles. *J Appl Biomech* 19, 39-48.
- Sugisaki, N., Kawakami, Y., Kanehisa, H., Fukunaga, T., 2011. Effects on muscle contraction levels in the force-length relationship of the human Achilles tendon during lengthening of the triceps surae muscle-tendon unit. 44, 2168-2171.
- Zuurbier, C.J., Everard, A.J., van der Wees, P., Huijing, P.A., 1994. Length-force characteristics of the aponeurosis in the passive and active muscle condition and in the isolated condition. *J Biomech* 27, 445-453.

文化理解とコミュニケーション能力向上のための スペイン語教育の試み

大森 洋子 (研究代表)・原田 勝広

(報告執筆 大森 洋子)

0. はじめに

本プロジェクトは、学生のオンラインによる外国語学習の効果を探るものである。中南米のスペイン語を母語とするグアテマラで展開されているSKYPEによる会話トレーニングシステムと提携し、インターネットを利用しネイティブスピーカーによる直接指導によって初級の学習項目の練習を補強すると同時に、コミュニケーションテーマをグアテマラの社会、文化と結びつけることで、学生のコミュニケーション能力の向上を図ること、そしてその活動を通し、学習者の学習動機の向上またその維持にどの程度貢献するか、ラテンアメリカ社会への理解がどのくらい深まるかなどを検証することを目的とした。

本報告は、1. オンラインコース開講までの準備、2. 学生の実施状況、3. 実施先からのフィードバック、4. 学生からのアンケートに基づく実施報告、5. 総括および今後の課題の5節からなる。

1. オンラインコース開講までの準備：教材準備

本プロジェクトでは、グアテマラのオンラインコース、スパニッシモに依頼し、本学学生から希望者を募り、1学期程度の学習ができる自習コースを展開することで、学習者の自律学習の姿勢を養成すること、スペイン語学習の動機付けを高めること、さらにスペイン語がラテンアメリカでもはなされていることを理解し、ラテンアメリカへの興味、グアテマラへの興味を持ってもらうことを意図して、計画した。

従って、内容は、初年度で使っている教科書の学習内容に合わせ、1年からの学習者でもさらに2年からの学生が復習、会話実践を目的として受講できるように工夫してもらうこととし、教材開発を行った。

教材開発については、スパニッシモから提案されたものをこちらで確認し、問題点についてコメントし、修正を繰り返した。独自教材の特徴として目指した点は、①より会話実践コースとしてふさわしいコースにすること、②文化の理解のために役立つような教材、③グアテマラ在住の教員でしか教えられない要素を取り入れることであった。文法についての説明、練習等は最小限にとどめ、コミュニケーション能力を向上するためのアクティビティを盛り込むこと、教室で使っている教科書にはない、グアテマラについての理解を深めるような教材を挿入することを提案した。これらについての修正提案、修正案についての検討はスカイプで3回の会議によって行った。

2. SKYPE 授業の開始と学生の実施状況

実施時期を学生が授業になれた頃が最適であろうと考え、実施開始を5月中旬とし、説明会を4月30日、5月1日にそれぞれ横浜校舎、白金校舎で行った。募集定員を15名としたところ13名の応募があった。(うち、1名はアメリカ留学中の学生)

4年生：6名、3年生：3名、2年生：1名、1年生3名（男子学生：2名、女子学生11名）、文学部：1名、経済学部：2名、社会学部：1名、法学部：1名、国際学部：7名、心理学部1名
このうち、授業以外でも短期留学プログラムなどで学習を続けていた学生が6名、授業でスペイン語を1年以上学んでいる学生が4名、1年生が3名という状況であった。この数字は、学年が進むにつれて、スペイン語の学習により具体的な目標をもつようになる傾向を表しているとも言える。

グアテマラとの時差および担当教員の都合等で、授業は主に早朝、または夜10時以降の時間が設定された。当然のことだが同時帯(深夜)への希望が多かったため、時間割の調整が難しく、実施直前までの調整が必要となり、コーススタートに支障をきたし、コース最初は授業への出席率が悪かった、という報告を受けている。授業開始は曜日等によって若干異なるが5月15日、50分の授業が1週間に1回、計12回行われた。最終的には、出席率は77.6パーセントであった。

3. SKYPE 授業実施、スパニッシモからのフィードバック

コース開始当初は、学生が指定の時間にコンタクトしないような状況があった。しかし、最後には、77.6パーセントという出席率となった。回を重ねるごとに、授業に出席する学生とそうでない学生に差が観察されるようになった。

授業では、最初はネイティブスピーカーとの会話に戸惑いもあったようで、沈黙の時間もあつたが、回を重ねるごとに質疑応答等ができるようになってきた。同様に、リスニングにも少しずつなれていった。一方、リーディング課題では辞書がないと作業ができないなど問題があり、読解作業をこなすのに時間がかかり、なかなか進まなかったという報告があった。さらに、コースを自律学習の1つの手段として位置づけ、プロジェクト主催者側からのチェックをしなかったためか、コースで出される宿題等についてきちんとこなさない学生等も見受けられた。受講者は積極的参加グループと申し込みが興味本位であったために実際の授業についていけない2つのグループにわかれたと言える。積極的な学生は、コース終了後もメール、facebook等を通じて交流が続いているようである。

4. 受講後のアンケート結果から

受講後にアンケートを行った。13名受講者のうち8名から回収ができ、それぞれの総括はおおむね肯定的なものが多かった。出席率に関する質問では、ほとんどが毎回出席、または、1、2度の欠席のみにとどまっている。

以下がアンケート結果である。（回答数 8）

設問1：参加はどの程度でしたか。全出席 4 ほぼ出席 4

設問2：授業内容はどうか。難しかった点、簡単すぎた点など自由に記載してください。

- a. 先生がとても親切でやりやすかった。ずっと続けたかった。
- b. 初回は簡単な挨拶や自己紹介だったので、スペイン語の授業でやっているような内容で簡単だった。回を重ねるごとに、人物描写や道案内など使う語彙も増え、時制などの文法が難しかったが、実用的な表現を学ぶことができた。
- c. 授業で提供してもらった内容自体は面白くやりやすかった。難しいところはほとんどなく、会話入門としては簡単すぎることもなくちょうどよかった。
- d. きちんと私のペースに合わせてくれた。しかし、課題がやや易すぎた。現在形を中心にしか習わなかったから、もう少し実践的でもよかったと思う。
- e. 日常会話がほとんどだったので、使える表現をたくさん学べてよかった。
- f. わからなくて言葉に詰まっても根気良く待ってくれるし、レベルに合わせて英語も交えながら説明してくれたのでとてもわかりやすかった。教材で、文章を読んで問題に答える形式だったが、割と簡単だったと思う。ただ少しレベルが上がっても自分が対応できていた自信はないのでちょうどよかったのだと思う。
- g. 少し簡単だと思う点がありましたが、しかし順番に進められていくのでそれを伝えることもできませんでした。教材をその日に配布されるので、もう少し事前に配布し、単語を調べる時間があればもう少し高度な内容が学習できたかなと感じております。
- h. 自分のレベルにあった教材を使って授業をするので、しっかり勉強できてとても良かった。

設問3：授業のなかで良かった点をあげるとするとどんな点ですか。具体的に書いてください。

- a. 先生がきちんとレベルに合わせて進めてくれる。私の勉強のスタイルに合わせて授業を行ってくれた。通信障害になった時も違う時間に回したりしてくれた。
- b. 先生との1対1のコミュニケーションで、自分のペースにあった勉強ができた。間違った表現を使うとすぐに訂正してくれるので、その場で覚えることができ良かった。受講期間終了後も、メール等で、担当の先生に質問すると丁寧に答えていただけるのでとても助かっている。
- c. 先生が英語を理解できたので、英語でスペイン語を学ぶことができ個人的には日本語でスペイン語を学ぶやり方よりも適していた。
- d. 先生とフレンドリーにさまざまな話ができたと。タスクをこなしていく授業というより会話中心であった。また、何か伝えようとして言えないときずっと待っていてくれた。授業のあとのフィードバックコメントもよかった。スカイプなのでわからない単語に出会ったとき、チャットのところでやり取り、説明ができること。先生がずっと同じ人だったこと。最終的に教師と生徒の絆ができた。

- e. 先生が親切だった。先生は英語も堪能だったので、スペイン語がわからないときは英語で質問したら、わかりやすい英語で説明してくれた。先生と年齢が近く、彼女も学生だったため、むこうの学校の様子などをきけたこと。2の質問同様、日常会話で使える表現をたくさん学べた。なにより、ネイティブの人と会話することでスペイン語の力が伸びたと実感することができた。一番はやはり、すごく楽しく会話できた点。
- f. 先生と雑談ができること。何かを話そうとすると、いきなりだと単語が出てこないので授業の前に多少調べて準備していたので、準備自体もいい勉強だし、話していく中で先生の話も聞けるので、楽しい。わからないことがたくさんあるので正確に理解できるわけではないが、家に居ながらスペイン語で会話できることがうれしい。問題の意味や単語がわからないときに気軽に質問できることも良い。
- g. 生きたスペイン語をそのまま学習できる点です。教科書の丸暗記では決してでてこない言い回しや単語、様々な挨拶表現や感謝の伝え方などを学ぶことができました。そして講師の方が住んでいるグアテマラの地形や文化なども知ることができ、自文化を知り、表現する力もつきました。ネイティブの方とお話できる機会は日常では皆無なので、この機会が与えられて本当に良かったです。
- h. 分からないときは、分かるまできちんと説明してくれるところ。

設問4：授業内容等でこれから改善したいと思われる点がありますか。あれば書いてください。

- a. なし
- b. グアテマラの天候やインフラ整備等でスカイプの調子が左右されやすいので、授業の途中で突然回線が途切れてしまうことが何度かあった。宿題や自習用の教材をもっと出してほしいかった。
- c. いきなり授業のマテリアルに入るのではなく、最初の5分ぐらいはお互いの日常会話について楽しみたい。授業内容だけで、話題を探すのはつまらなくなる点がある。
- d. 個人個人のレベルを適切にみて、課題も考えて出すべきだと思う。会話のみなのか、文法とかも教えていくのかあいまいで授業がだらだらしがち。
- e. なし
- f. 授業の時間の選択肢が早朝か深夜しかなかったのがつらかった。ただ、大学の厚意によって無料で受けられることを思うとありがたいことで、今後自分でもスパニッシモで学習を続けたいと思う機会になったので良かった。最初の授業日を知らせる教養教育センターからの連絡がほしい。何を準備していつ始まるのか分からないまま、初回に参加できなかった。
- g. 教養教育センターの連絡が遅い。授業は毎回資料が配布され、それを朗読し、意味を確認、問題を説く、のような方式で進められました。テストなどもなく、気軽に授業できるところ

が魅力であり特徴だとも思いますが、もう少し一つ一つの授業につながりがあるものだとさらにやる気がでると思います。(例えば授業のはじめに小テストやクイズの出題など)

h. 特になし

設問5：授業を受けて、自分のスペイン語力のどんな点が改善されたと思いますか。具体的にあげてみてください。

- a. 聞き取り能力はもちろん、話すことへの抵抗が少なくなった。スペインにしか興味がなかったが、スペイン語圏への興味も増した。
- b. 受講当時は、スペイン語を使った接客の仕事をしていたため、良く使う会話表現を学ぶことで、すぐに仕事に活用することができた。また、スペイン語を話せば話すほど、中南米圏のお客様とも打ち解けることができたので、スペイン語の習得にますます意欲がわき、現在は資格取得を目指し努力している。
- c. 短期間で大分スペイン語での会話力が上達した。思った以上に、スペイン語が話せて、理解できることに自分でも驚いた。実際にスペインの人よりも、南米のスペイン語のほうが聞き取りやすいので、南米に旅行などについて自分のスペイン語で力試しをしてみたいと、モチベーションも上がった。11月末に受けた、DELEA2のオーラル試験でも役立った。(が、試験官のスペイン語が想像していたよりもかなりの速度だったので、スペイン語の早い速度にも慣れたい。)
- d. 忘れていた単語を思い返すことができた。普段だとなかなか話す機会がないので、スペイン語で必死にコミュニケーションをとることは自分の文法や表現の間違いをを見つけることができる。自分で言いたいことを伝えるための表現を学べた。
- e. 一番はやはり聞き取り能力が向上したことだと思います。回数を重ねるに連れて簡単な文章などは辞書を使わずに読めるようになりましたし、簡単な質問などにはすぐに答えられるようになりました。
- f. 会話が少しできるようになった。グアテマラに興味を持つようになった。
- g. スペイン語の学習意欲が向上しました。正直なところ、会話ができるようになった、リスニング力が向上したとは思えず、実感することもなかったです。しかしこの授業を受講することには大きな意味がありました。先程も述べさせていただいたように、生きたスペイン語を学習できる機会はないからです。生きたスペイン語を学習することで、フレーズを覚えて使ってみよう、など、普段机に向かって学習する時とは違う勉強の仕方を学ぶことができました。なによりスペイン語を学習することが毎回とても楽しかったです。
- h. あいさつや簡単な会話ができるようになりました。スペイン語にもとから興味があったけど、さらに増しました。

設問6：なにか具体的にグアテマラ、ラテンアメリカについての理解に役立った点、興味を持った点はありますか。具体的に記入してください。

- a. ラテンアメリカの国々そのものに興味がわきました
- b. 先生との会話で、グアテマラの民族衣装、歴史的建造物、生活等を教えていただいたので、ラテンアメリカを観光してみたいという気持ちが芽生えた。
- c. フィリピンに留学していたこともあって、フィリピンと同じスペイン植民地文化が残る南米に関して、学部分野（社会学）と関連させた知識も得ることができ、相手の文化や習慣、社会などにとっても興味を持つことができた。語学学習ツールだけの要素としての授業内容だけで行うのではなくて、実際に相手の言語を使って相手の国のことを知るということが、私にとって多言語を学習する意義でもあるので、今回そのような機会をもてたことに非常に満足している。ある程度意思疎通できる自信もついたため、今後も積極的にこのような形式でスペイン語会話の受講を試みたい。
- d. グアテマラの人々の生活や貧富の差に興味を持った。グアテマラでは、排水溝がごみで詰まり、大雨のときに浸水するのが日常という話を聞いて大変驚いた。スペインのスペイン語と中南米のスペイン語の違いにも興味を持てた。たとえば、「自動車」はスペインだと coche だが中南米では carro であるなど。
- e. 先生は大学に通っていたり、趣味でイタリア語や日本語を勉強していたり、また旅行などにも行っていたりして、わりと裕福な？生活をしている印象だった。だが、グアテマラの貧困率は私が思っているよりも高かったり、治安などはあまりよくないと知り、グアテマラという国がどんな国なのか、特に何に興味をもったというよりは、国や国民、国風はどんな感じなのか興味を持ちました。
- f. アンティグアの写真をを見せてもらい、行ってみたいと思った。
- g. 南米にとっても興味があったので、スペイン人の先生でなくグアテマラの方で私はとても満足しています。グアテマラの文化、観光、地形、歴史なども授業で触れていただき、とても楽しかったです。南米の方を先生とすることで、同じ意味でもスペインで使われる単語と中南米で使われる単語は違うことなどをすることができていいと思います。将来グアテマラに行き、先生にお会いしたいと思いました。
- h. グアテマラに行って、SKYPEの先生に会いたいと思いました。

設問7：その他（自由記述）

- a. 出来ることなら週2で、もっと言えば通年で授業をしたかったです。
- b. スカイプでの授業は、ネット環境さえあればどこにいてもできるので、とても助かります。私は受講当時、アメリカに留学をしていて日本にいなかったのですが、このような形で授業を受

ける機会がもっと増えれば、事情があって大学へ通っていない学生にも有効な学習方法になる、と考えました。

- c. なかなか忙しくて、思った以上にスペイン語学習に時間を割くことができず、せっかくこのような大学で提供していただいた機会を十分に活用することができず大変申し訳ないと思っている。ただ、本大学の学生に対するこのような積極的なスペイン語学習機会の提供いただいたことによって、入学してきたときから目標にしていたDELEのA2の試験レベルまで達することができたので、卒業後もスペイン語学習を続けて、いつか南米で国際協力ができるレベルに達するまでの準備を今後とも着々と進めていこうと今から意気込んでおります。
- d. SKYPEでのスペイン語の授業がとても楽しかったので、春休み、自分でコースをお金を払って申し込もうと思っています！
- e. 今後も絶対に続けてほしい。スペイン語を学びたい学生にとってはとても刺激的で、意欲もより向上する。学びたいけど自信がないという人でも、先生が親切なのでぜひ参加してほしい。
- f. 現在4年生で、これまでTOEICやAVEのオンライン学習コースなど、さまざまなものに参加し学習してきましたが、この半年間のSKYPEスペイン語コースの受講が様々なプログラムの中で明治学院大学にきて一番為になった学習だったと感じております。それは生きたスペイン語を、会話を通じて学習できるところにあります。自分の自由な時間ではなく、ある程度時間を拘束され、毎週同じ時間に学習する癖をつけることで学習が習慣化されます。そして学習のペースは個人の学習レベルに合わせてもらえるので集団授業よりも効率的に学習できます。
- g. SKYPEでスペイン語を学ぶ機会をつくってくれたことに感謝しています。またやりたいと思いました。

5. 総括および今後の課題

学生のアンケートからみて、学生のコミュニケーション能力の構造、動機付けの向上および維持、さらに世界のスペイン語、ラテンアメリカ、グアテマラ理解にむけて大きな意味を持つことがわかった。

第1に、SKYPEコースは教室外でスペイン語に接する機会のない環境での学習にとっては大きな意味のあることがわかった。教室で学ぶ様々な語彙、フレーズがリアルな文脈のなかで使われることで、外国語が単にひとつの教科ではないコミュニケーション手段であることを体得したと思われる。さらに1対1のコミュニケーションを体験したことが大きく、そこで行われた会話自体がリアルなものとなり、スペイン語をコミュニケーションの手段としてとらえることができたと言える。

これは個人指導により、個人の能力に応じた指導が可能となったこと、話すこと自体の抵抗感を消すという効果があった結果と言える。この1対1の関係で築いた人間関係は、今後もその交流が続けられ、スペイン語、外国語を学習するための大きな動機付けとなっている。

第2に、授業ではなかなか伝えきれないスペイン語圏の個々の文化的な内容、社会状況などをコースの内、運営のなかで感じることができたようで、グアテマラの文化、観光地、歴史などを通じて、学生のラテンアメリカの興味は高まったと思われる。さらに、グアテマラのスペイン語教師と接することで世界のなかのスペイン語、スペインのスペイン語との違いなどへの気づきにも役立ったと思われる。

学生からのフィードバックをみる限りは、今後もすこしずつ充実させながらコースを続けていくことに意味があると考えられ、将来的には自律学習のための一つ的手段となり得ると判断できる。

大きな問題点としては、参加学生のレベルのばらつきをあげることができる。入学間もなく初歩の段階から参加する学生、または短期留学プログラム等に参加しスペイン語により興味をもった学生がさらに学習をすすめたいということで受講した学生等がみられた。従って、今後は受講コースを初歩コースに限らず、本人のレベルにあったコースを受講させるなど教員スタッフと事前に詳細に打ち合わせし工夫が必要だと思われる。

また、学習の評価としてコースの目標を明示し、どこまでそれが達成できたかなどを学習者にフィードバックさせるようなシステムの構築が必要だと思われる。

最後に、講座としてスタートするにあたって、オリエンテーション、申し込み時期、申し込み受理から講座開始時期までについてあらかじめ計画し、学生への告知を徹底し、コースがスムーズにスタートできるように準備をすすめることが不可欠である。

日本の朝鮮統治期における 明治学院留学生に関する共同研究

李光洙(イ・グワンス)について —波田野節子氏の研究を中心に—

嶋田 彩司・金 珍娥・徐 正敏・鄭 栄桓・渡辺 祐子・佐藤 飛文・野間 秀樹

下記の通り、3回の研究発表会を開催した。

5月24日(金) 報告者: 波田野節子氏

7月3日(水) 報告者: 松山献氏

7月25日(木) 報告者: 李容敏氏・孫昇鎬氏・姜イレ氏

これらのうちで、研究プロジェクトの基調をなすものは波田野氏による研究報告であり、11月に計画されていた李光洙に関わる国際シンポジウムの準備を念頭に、それ以降の研究会も主として李光洙(イ・グワンス: 以下は漢字表記する)に焦点を当てて報告と意見交換をおこなった。

本稿は、それらの共同研究の成果を稿者(プロジェクト責任者: 嶋田彩司)が総合したものであるが、標記のごとく波田野氏の研究に拠るところが多いことをあらかじめ記しておく。

波田野氏によれば、1876年の開国以降1910年の日韓併合までの期間における朝鮮半島出身者の日本留学は、その盛期を三つに分けることができるという(『韓国近代作家たちの日本留学』、2013年3月、白帝社)。すなわち第一は1881年の紳士遊覧団62名の来日時から1884年の甲申政変まで、第二は1894年にはじまる甲午改革からの二年間、そして第三は皇室特派留学生が派遣された保護条約前年から日韓併合までである。

第一期については、紳士遊覧団に随行して残留し、慶應義塾等で学んだ兪吉濬、柳定秀、尹至昊が知られており、第二期には開化派政権のもと二百名を超える留学生が派遣されたなかで安国善等が著名である。第三期には上記特派留学生のほか、多数の私費留学生が来日しており、波田野氏によれば日本留学が旧来の科擧の代替として機能したかのごとくであったという。

そして、本プロジェクトのねらいに即して特筆すべきことは、第三期の留学生たちには、併合直前の政治状況下、留学先である日本に対して祖国の迫害者として敵愾心を抱く傾向があったとされていることである。帝国主義下の日本が併合前とはいえ実質的な植民地とした朝鮮半島でおこなった歴史的事実を思えば、その心情は当然のものといえなくもないが、そうであればなおさら、祖国を呑み込もうとするまさにその「敵国」へ留学して学ぶ若者たちの心理的ストレスは察するにあまりある。

たとえば、崔南善は日本の書店にある豊富な刊行物を目にして、

その前でうなだれ、ため息をつき、つづいて拳を握りしめ、握りしめながら、「いつかは機会があるはずだ」という望みをいだいて自分を慰めた。

と書いている。

同じ時代を生き、支配者日本の物心両面を実際に経験した者として、李光洙もまたそのような日本に対する複雑に屈折した感情を抱いていたのであるとすれば、そこに李光洙の後年の親日的態度

を読み解く鍵も含まれているように思われる。

李光洙は1892年、平安北道に生まれた。貧しい家庭であったというよりも、家庭そのものが崩壊しており、十代のはじめは半ば浮浪児のようであったが、やがて東学教徒に助けられてそこで伝令のような使い走りをしていたとされる。1904年に創設された東学党の政治団体「進歩会」は、翌年「一進会」となり、親日的な活動を始めるが、その一環として李光洙は日本への留学の機会を得る。

ところが程なく、東学党では第三代教祖孫秉熙（「天道教」）と「一進会」の李容九のあいだに内部分裂が生じ、留学生への学費給付が停止してしまう。このため李光洙の留学は中断を余儀なくされる。しかし、日本に留まった「一進会」留学生の抗議示威行動（「断指事件」）が功を奏して、李光洙は官費留学生として再び渡日する。そして、白山学舎での受験準備を経て、1907年の9月に明治学院普通部三年に編入学するのである（第一次留学）。

やがて李光洙は、1910年に明治学院を卒業、李昇薫の創立した五山学校に赴任する。この学校での教員生活は、あいだに大陸放浪の期間を挟んで1915年までつづき、その後彼は同年9月に早稲田大学予科に入学、翌年には同大学の文学部哲学科に進んでいる（第二次留学）。

五山学校での生活を切り上げ、三度目の来日を果たすにあたっては、五山学校復帰（1914年8月）時にすでに「東京に行き、学業を継続する決心」（「文壇生活三十年の回顧」）があったということであるが、彼にそう決意させた要因の一つとして、第一次留学時に、文一平や洪命憲と知り合ったことをあげることができよう。

李光洙と兩名との出会いは、1906年（一旦帰国前）の大成中学時代に同じ下宿に住んだことがきっかけであったという。文一平は歴史家、教育者として今日なお高い評価を得ている人物であり、明治学院、早稲田大学の同窓でもある。李光洙の明治学院や早稲田への進学に影響を及ぼしたことも考えられよう。洪命憲は、李光洙に文学の魅力を伝えた最も重要な人物のひとりである。波田野氏の研究によれば、バイロンや漱石等々の西洋文学や日本文学を、李光洙は洪命憲の蔵書を与えられることで知ったという（『李光洙・「無情」の研究』、2008年9月、白帝社）。

つまり、李光洙の言論活動が活発化し、文学活動が本格化するのには、1915年の早稲田時代以降であり、彼が早稲田で多くのことを学んだことはまちがいない。代表作『無情』が執筆されたのもこの時期（1917年）である（11月に開催されたシンポジウムにおいて、パネリストのひとり方瑛昊氏は、『無情』とカントの関係を論じ、そこに早稲田大学哲学科教授波多野精一が影響を及ぼした可能性に言及している）。しかし、そうであるとしても、そのような文筆家李光洙を育んだ母胎ともいべき時と場所が第一次留学時代にあったことは注目されてよい。

そして、上記した崔南善もまた李光洙の友人のひとりであった。1908年に崔南善が創刊した月

刊誌『少年』に李光洙は初期の小説・論説を発表している。おそらくは崔南善が示したような（上掲）支配者日本に対する反発と母国への愛着を李光洙もまた共有していたはずである。そして、そのような感情をひとまとまりの論理的なことばとして表明するための思想的、文学的契機を彼らはほかならぬ「敵地」日本からうけとり、日本語を通して（つまり書店にずらりと並んだ本の繙読によって）鍛錬したのである。

波田野氏は次のような李光洙の二面性を紹介している（前掲『韓国近代作家たちの日本留学』）。すなわち、雑誌『洪水以後』三月号（1916年）に発表された「朝鮮人教育に対する要望」において、李光洙（筆名：孤舟生）は、内地人と同じく「天皇の赤子」たる朝鮮人に対して同等の教育を要求するが、それが実現されるなら「朝鮮人は真に皇恩に浴したるを衷心から感謝するであらう」などと述べている。これがいわゆる親日家李光洙というイメージに直結する言辞であることは明白であろう。

ところが、一方において李光洙は、同誌次月号に匿名で投稿した文章（「朝鮮人の眼に映りたる日本人の欠点」）においては、「日本人はただに朝鮮人を冷遇するのみならず、進みてその職を奪い、その資財を捲き上げて餓死せしめんと努めつつあり。日本人は我々朝鮮人にとりてはあたかも寄生虫のごとし」などと痛烈に批判、罵倒しているという（同文は結果的には不掲載）。

後日になって、李光洙は自らこの点について次のように述べている。

「われわれ朝鮮人の教育機関を作ってくれ」と言いたい場合は、言論人や公職者は「同じ天皇の赤子ではないか、なぜ教育に差別があるのだ」と言わなければ、当時は通じなかった。官公職の朝鮮への制限や差別打破をさげふための公式は、「みんな天皇の赤子ではないか、内鮮一体ではないか、明治大帝の御心ではないか、なぜ内鮮差別をするのだ」というものだった。（「나의告白」、1948年）

ここにいう「公式」の語を、正当な自己弁護と受け取ることも、見苦しい言い訳と断罪することも稿者にはできない。この複雑な屈折を、そのような時代を経験しないものが、しかも加害の側にあったものの子孫たちが評価をするためには、より深く深く李光洙のなかに沈潜する時間が必要であろう。もちろん稿者は宮田節子氏（『朝鮮民衆と「皇民化」政策』）や波田野氏が自らの見解を述べられるその内容に傾聴し、それぞれがそれぞれにそう述べられる正しさを認めたいと思うが、稿者自身もまたそのように考えることができるかどうかについてはまだいえない。

11月に成功裏に終了したシンポジウムのテーマは、「イ・グワンスとはだれか」であった。ここでは、パネリストとして寄稿、発表をされた日韓の研究者それぞれの李光洙が語られ、稿者はそれを興味深く聞いた。本研究プロジェクトのゴールを稿者はシンポジウムに設定した。そのシンポジウムを終えたいま、ようやくその李光洙と向き合う地点に立ったのだと感じている。

「南西諸島の総合的研究」 ——奄美大島の現在

佐藤 アヤ子・原 宏之（代表）・Grimes-MacLellan Dawn Marie

研究成果の具体的内容については、下記の各レポート、及び本号と同時期に刊行される『カルチュラル』（2014年3月発行）所収の論文を参照されたい。ここでは、三名のそれぞれがどのような見地からプロジェクトにあたったのか、また具体的成果の概要についてのみ略記する。

結論から言えば、各メンバーの専門研究の蓄積とよくマッチした、成功したプロジェクトのひとつだとあえて記させて頂きたい。このことは研究成果を質の面から自画自賛するものではない。メンバーの全員が、プロジェクトに参加してよかったと思える学びの機会、またレポートも報告書以上のそれぞれひとつの短論文であり、本学から発信されるにふさわしいものと思われる。

明治学院大学の各学部では、それぞれの専門領域の視座から沖縄（琉球）研究がなされてきた。わたしたちのプロジェクトは、学内及び学外の沖縄に関する先行研究の恩恵に浴しながら、沖縄研究の土台の上に立ち、奄美大島にスポットをあてた。当初の憶測よりも内実のともなう成果が得られたことを、下記のレポート、および『カルチュラル』所収論文にてご確認いただければ幸いである。

このプロジェクトが、慢心のそしりも惧れずに成功と述べる背景には、佐藤が北米を中心とした先住民族研究の業績をもとに、またドーンが人類学の専門的見地と、外から見た日本のエリア研究の問題と重合するかたちで、加えて原が奄美フィールドの経験を予備研究に供出するかたちで、それぞれの立場からインタディシプリン、インタフィールドにもちよったまなざしが奄美に結実したことがあると筆者たちは考えている。

民間伝承の説話、グローバル世界、それぞれの視座から奄美に焦点を絞る下記の論考を紹介する。

西南諸島の総合的研究

北米先住民のメディスン・マンと沖縄・奄美地方のノロ（祝女・神女）

およびユタ（民間霊媒師）の比較研究

佐藤アヤ子

〈西南諸島の総合的研究〉では、佐藤は北米先住民のメディスン・マン¹と沖縄県と鹿児島県奄美群島に存在する女性司祭ノロ（祝女・神女）およびユタ（民間霊媒師）の比較研究を行うことが目的である。2013年12月21日～23日まで比較研究のため、奄美大島において調査、および資料収集を行った。特に、奄美市立奄美博物館での資料収集、学芸員からの情報提供は、研究過程において大変貴重なものとなった。

北米先住民のメディスン・マンと沖縄・奄美地方のノロ（祝女・神女） およびユタ（民間霊媒師）の比較研究調査

メディスン・マンは、北米先住民社会の中では重要な地位にあり、部族住民からは熱い信頼を受けている預言者であり、病気治療者であり、薬剤師でもある。長い修行の末に超自然能力を会得した者で、男女どちらでも存在する。霊界と交信ができ、特別な能力を持つといわれている。そのような超自然力を持つといわれているメディスン・マンは、超自然界からの声を自らが媒体となって人間に伝える行為を行うこともある。その場合、霊魂の話す言葉を部族の言語で依頼者に伝え、特に死に近い人にはその霊魂に呼びかけて勇気づけ、必要な指導も行う。また、病人の治療法の一つとしてある儀式を行うことで原因を突き止め、その根を断つことを行う。医学が発達している今日において、西洋医学は先住民社会に浸透し、病気治療の術は薄れてきてはいるが、それでもメディスン・マンに頼る北米先住民は多いといわれている。

また、メディスン・マンは預言者でもあるので、治療にあたるだけでなく、超自然力を借りて過去の出来事や未来の危険を予言したりするとされている。このメディスン・マンは、広義においては東北地方のイタコや沖縄・奄美地方に存在する女性司祭ノロ（祝女・神女）やユタにあたる存在である。カナダ先住民のメディスン・マンは世襲制が多いことも特徴的である。

沖縄県と鹿児島県奄美群島の信仰におけるノロは、集落の繁栄、平安、農作物の豊穰祈願や感謝の儀式を行う（神女）として琉球王朝から任命された女司祭である。かつては集落の守り神的存在であった。悪霊払いと祝福の呪術行事も執り行っていた。神官であるノロはすべて女性であるが、現在ではノロのほとんどが年配の女性、老女であるといわれている。ノロは世襲制が原則で、ノロ殿地と呼ばれる家系から出ている。多くは琉球王国時代に王府より任命された者である。

ノロに対し、沖縄や奄美群島には民間霊媒師であるユタが存在する。ノロが集落という公の場での農耕儀礼や防災儀礼などの決まり行事が中心なのに対し、ユタは部落や村落の個々の家や家族に関する「運勢、吉凶の判断、禍厄の除災、病気の平癒祈願」など私的な呪術信仰に関与していることがほとんどである。

ユタの特徴としては一種のトランス状態にはいって、口寄せ²を行うことである。ユタはまた、死者儀礼や死霊供養に関与することも多い。ノロは世襲されていくのに対し、ユタは基本的には世襲制を持たなく、本人だけということになっている。また、女性のユタが多いが、男性のユタもいる。ノロとユタを対比すると、性格、生態、機能など多くの点で際立った相違点が認識されるが、両者とも西南諸島にみられる民間信仰の底流に流れるシャーマニズムを支えるものとなっている。このシャーマニズムは、北米先住民とも共通する。

シャーマニズムは往々にして類似性が多いが、今回の調査で分かったことは、カナダ北西海岸に住むハイダ族やトリングット族のメディスン・マンが、沖縄や奄美群島のノロやユタとかなりの類似点があることである。それは、両者が海に囲まれているという地理環境に由来していると思われる。カナダ北西海岸のメディスン・マンは、クジラや魚の群れがどこにいるかなども予言して部族に貢献することで尊敬を得ている。一方沖縄や奄美群島の漁民たちのユタへの依頼度は高いと聞く。この背景には男性の仕事が主に漁業であったために安全祈願、大漁祈願を含めて島で待つ女性たちを神格化させる必要性があったとも言われている。

現在では、ユタ信仰は迷信であるという考え方が多勢である。しかし、以前調査で沖縄本島を訪れた際、ユタの家を訪れる人が今なお多くいることを知った。³ 今回の奄美大島での調査では、そのような光景に出会うことはなかったが、奄美群島では民間信仰としては今なお根強く残っていると聞く。今回訪れた奄美大島では、ひっそりと活動しているユタの情報を得ることはなかなか難しいといわれているが、それでも30人ほどのユタが実際に活動を行っているという情報を得ることができた。

今後の研究課題としては、このような民間信仰と口承民話の関係性を考察することである。

参考文献

- 金久正『復刻：奄美に生きる日本古代文化』、南方新社 2011
 麓純雄『奄美の歴史入門』、南方新社、2011
 田畑千秋『奄美大島の口承説話』、第一書房、2005
 加藤庸二『原色 ニッポン《南の島》大図鑑』、阪急コミュニケーションズ、2012

1 白人社会では、「メディスン・マン」を「シャーマン」と呼ぶが、カナダ・アメリカの先住民族はメディスン・マンが正式な呼称であると言う。
 2 死者の霊と交信すること
 3 筆者が家の前に多くの車が駐車しているのを見て現地の人に尋ねると、ユタの家だと教えられた。

Preserving island heritage and culture

Dawn Grimes-MacLellan

It takes only a brief time for a newcomer to Amami Oshima to recognize that she has entered a rich ecological habitat with dense forests, distinct wildlife, crystal clear waters and colorful coral reefs. Also readily noticeable is the relaxed pace of the island. Nobody is in a rush here. Drivers go at or below posted speed limits, shopkeepers take time to chat, and meals are enjoyed leisurely. Digging a little deeper, there is much to learn about the island's traditions, festivals, music, dialects, local industries, and food culture. Ranked the second largest remote island in Japan after Sadogashima in Niigata, Amami Oshima is about as distant from the metropolis as it gets in terms of both kilometers and lifestyle. Yet, at the same time, the markers of mainland Japan are clearly present, particularly in the largest town of Naze, where there is an abundance of taxis, vending machines of all types, a Daiei supermarket, Tsutaya rental shop, and Lawson convenience store. In addition, television programming reflects dominant mainland culture and the general population speaks standard Japanese.

In such contexts where a dominant culture contrasts greatly with local culture, it can be challenging to retain, promote and sustain cultural traditions. According to Kuwahara (2013), for example, until the 1970s the distinct characteristics of Amami culture were viewed negatively against the backdrop of the surging Japanese economy. "As a result, using dialect in school was strictly forbidden, as educators were concerned that if school students could not speak standard Japanese well they would be discriminated against and/or be socially-maladjusted and lose self-confidence if they later moved to reside in urban centers in mainland Japan" (Kuwahara 2013:5). More recently, and in particular due to the nationwide musical hit of *Wadatsumi no Ki* by Amami singer Hajime Chitose in 2002, the value of Amami culture has shifted, and facilities such as the Amami Natural History Museum, Oshima Tsumugimura, Amami Park and its Tanaka Isson Memorial Museum of Art preserve and provide important local knowledge of the natural environment, history, and culture of the area. Moreover, the local government is now striving to secure UNESCO's World Natural Heritage status in summer 2016 (Amami City website 2013). While these efforts to revitalize local culture and promote the distinct physical landscape of the Amami Islands beyond its borders may bring economic development through growth in tourism, the manner in which local culture and traditions are learned and sustained within the community, among local children in particular, has important implications for preserving a living local island culture that can be passed to future generations.

While in the past, schools disrupted local island culture by, for example, disallowing dialects to be spoken at school as mentioned above, and more generally through a national curriculum emphasizing the dominant social values of mainland Japan, educational reforms in 2002 introduced measures to decentralize the curriculum and “provide children with experience and learning in cooperation with the local community” (MEXT 20010:6). In the Amami Islands, increased autonomy under these reforms has brought increased emphasis on connecting local elementary and junior high school children to the cultural traditions, social activities, and rich ecology of their community. At Amami Elementary School, for example, morning reading time is spent reading local folk tales, and promotion of local knowledge is emphasized in various subjects throughout the curriculum as the chart below indicates:

Subject	Local Content
Life Environment Studies	Amami botony
Social Studies	Amami traditional culture
Integrated Studies	Grade 3: Amami nature & music
	Grade 4: Amami culture & language
	Grade 5: Lifeways of the community
	Grade 6: Rediscovering the value of local ecology, culture, industry, history, people; Study of the Reversion Movement
	All grades: Hachigatsu Odori, Shimauta, Rokucho
Music	Shimauta
Club Activities	Shamisen

表 1

Using a different approach, Yani Elementary School students engage with their local community through a variety of activities that give them hands-on experience from cultivating sugarcane and processing brown sugar, to using science time to investigate local flora and study the night sky across the seasons, to experiencing the ocean in a canoe while learning about the ways in which their ancestors traveled on the sea for fishing, trade and transport. Still other elementary schools incorporate different local features into the curriculum such as planting and cultivating taro root, studying traditional tsumugi silk textiles, researching the Ryukyu Ayu fish, learning about Amami food culture, and completing writing projects such as introducing one’s community through essay writing or developing a sightseeing guide of the local environment.

At the junior high level, students engage with the local community through varied first-hand experiences with local workplaces, industries, and welfare institutions. They also interact with

elder community members who share their knowledge of Amami traditions and culture, including hachigatsu odori (August dance), shimauta (community songs), shamisen, and island drumming. In addition to learning more deeply about Amami culture and history, junior high school students are also introduced to the study of environmental problems and sustainability for the future of the island community. At Koshuku Junior High School, students conduct research for a graduation project on island heritage and culture.

In addition to school-based activities that aim to connect children with the past, present, and future of the Amami Islands, other local initiatives also endeavor to build strong connections between children and their local cultural heritage. One notable project is the Society for the Storybook Creation of Folk Tales (Minwa de ehon zukuri no kai) which has completed two books to date, *Tsuki no naka no ippon ashi no musume* and *Tennin nyobou*. What is interesting about this project is that it has given children a real part to play in their own learning of local folklore. For each of the two storybooks, twelve to fourteen parent-child groups worked together for one year, choosing a tale, conducting research about it at the folklore history archives, consulting with a local folklorist, and visiting the local landscape. Under the guidance of various adults, the children developed the story in both standard Japanese and local dialect, and illustrated the tale with torn-paper mosaics. Throughout the process, the children's interests in the history of islands, local dialects, and folklore grew and it is said that they found the project to be immeasurably enjoyable. Though it may be difficult to connect children to their local cultural heritage and foster genuine interest and engagement when a dominant culture exists, it would seem that a project such as this that puts children in the central participatory role of engaging with local folklore has the potential to foster a deep interest in local culture that can be sustained into the future.

Preserving and sustaining cultural heritage and traditions for future generations in remote locations like the Amami Islands where a dominant mainland culture competes with local lifeways is a challenge. Curricular reforms in the last decade, however, have opened up opportunities for educational activities to connect children with their history, culture, traditions, music, industries, and natural environment. Additional local initiatives that give children a legitimate active part to play in the learning and production of local knowledge have the potential to build even stronger connections to the community. Investigation into the ways in which children themselves make sense of local cultural learning would be a worthwhile project in the future.

References

“World Natural Heritage” on *Amami City Homepage*, Retrieved on Dec. 23, 2013 from <http://www.city.amami.lg.jp.e.it.hp.transer.com/kankyo/sizenisan.html>.

Hatta Akio, “The Educational Environment on a Remote Island in Kagoshima.”, in *The Islands of Kagoshima: Culture, Society, Industry, and Nature* edited by Kei Kawai, Ryuta Terada, and Sueo Kuwahara, Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands (KURCPI), 2013, 21-28.

Kuwahara Sueo, “Research Issues in the Culture and Society of the Amami Islands.”, in *The Islands of Kagoshima: Culture, Society, Industry, and Nature* edited by Kei Kawai, Ryuta Terada, and Sueo Kuwahara, Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands (KURCPI), 2013, 5-13.

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Annual Report, 6, 2010.

以上二名の報告に加えて、奄美大島の自然（悠久の歴史のなかでの生成変化）とそれがもたらす色相環について論じた原の『カルチュラル』論文、以上三論考が本プロジェクトの成果の集成となる。最後に結びに代えて成果について若干の補足を。

メンバー全員で、奄美大島のフィールドワークを二泊三日で強行した。このことは、個別のフィールドワークでは得がたい、移動中の会話、食事での情報交換と、さまざまに融合の効果をもたらした。

本報告書及び『カルチュラル』収録論考以外の成果として、中間報告で明らかにしたノロ文化を中心とした、ショチョガマやマンカイほか祭儀・民俗性（ethos, Sittlichkeit）に関わることもある。本稿収録の佐藤報告以外に、原が担当したこの向きは、前述論文が、奄美研究の約十年の通過点としてのまとめだとしたら、ノロ文化はまったく予期しなかった新鮮な発見であった。このような貴重な機会をもたらせてくださった、明治学院、大学、教養教育センター附属研究所、またそのひとりひとりのみなさまに心よりのお礼を申し上げつつ、この報告文を閉じさせて頂きたい。

04 研究業績



Ⅰ 上野 寛子

【著書】

『学生と楽しむ大学教育 大学の学びを本物にするFDを求めて』清水亮・橋本勝 [編]、ナカニシヤ出版、2013年12月、全382頁

第3部（授業はこうして楽しみながら活性化できる）のうち、第10章「学生を魅了し、楽しい学習に導く」（181-200頁）を担当

【学会：ラウンドテーブル】

「学生の主体的学びを伸ばす授業の創り方ー初年次教育の授業デザイン、学生が楽しみ学ぶ授業実践法、学習環境と学習支援に求められるものー」初年次教育学会第6回大会（金沢工業大学）、2013年9月

「学生と楽しむ授業へ：コンサルティング・ワークショップ」第20回大学教育研究フォーラム（京都大学）、2014年3月

【学会発表】

「図書館利用を促進する授業デザイン」初年次教育学会第6回大会（金沢工業大学）、2013年9月

Ⅰ 越智 英輔

【論文】

- 児童における生活習慣が行動体力と防衛体力に及ぼす影響. 体力・栄養・免疫学雑誌. 22(3): 145-153. 2013年4月.
- 男子ラクロス選手における等速性筋力及び無酸素性パワー・間欠的パワーについての検討. 体力・栄養・免疫学雑誌. 22(3): 154-159. 2013年4月.
- 大学女子スポーツ選手における疲労骨折と骨代謝マーカーとの関係 -骨吸収マーカー“TRAP-5b”に着目して-. 日本臨床スポーツ医学会誌. 21(1): 119-124. 2013年5月.
- Clinical and basic studies of muscle strain injury (invited review). International Journal of Applied Sports Science. 25(1): 1-10. 2013年6月.
- 高校スキー選手の外傷・障害調査. スキー学会誌. 23(1): 45-48. 2013年9月.
- Bone metabolism markers in collegiate female runners. International SportMed Journal. 14(3): 148-154. 2013年9月.

- Effect of eccentric contractions of elbow flexor on bone formation and resorption markers. *The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness. in press.*
- 競技レベルが大学女子ラクロス選手の骨代謝及び骨質に及ぼす影響. *運動とスポーツの科学*. 印刷中.
- 異なる環境条件下におけるペダリング運動が生体に及ぼす影響. *運動とスポーツの科学*. 印刷中.
- β -hydroxy- β -methylbutyrate (HMB) とホエイプロテインの同時摂取が筋損傷の回復過程に及ぼす影響. *運動とスポーツの科学*. 印刷中.
- High force eccentric exercise enhances serum Tartrate-resistant acid phosphatase-5b and Osteocalcin. *Journal of Musculoskeletal and Neuronal Interactions. in press.*
- Eccentric contractions of gastrocnemius muscle induce nerve damage in rats. *Muscle and Nerve. in press.*

【学会発表】

- The relationships between AMP-activated protein kinase (AMPK) activation and FoxOs and myostatin expression in rat gastrocnemius after eccentric contractions. American College of Sports Medicine 60th Annual Meeting (Indianapolis, Indiana, USA) 2013年6月.
- The importance of sleep quality and physical activity for children's health: A focus on Japanese children. 21st International Union for Health Promotion and Education (Pattaya, Thailand) 2013年8月.
- 大学女子柔道選手における試合に向けた減量の実態調査. 第1回日本スポーツ健康科学学会(於東京) 2013年8月.
- β -hydroxy- β -methylbutyrate (HMB) とホエイプロテインの同時摂取が筋損傷の回復過程に及ぼす効果. 第23回体力栄養免疫学会(於東京) 2013年8月.
- 子どもの生活習慣と体力の関連について. 第23回体力栄養免疫学会(於東京) 2013年8月.

金 珍娥

- 『談話論と文法論 —— 日本語と韓国語を照らす』 金珍娥 著 2013年10月20日刊行東京：くろしお出版

黒川 貞生

【論文】

ブロッカーのポジションングがコンビネーション攻撃のディフェンスに及ぼす効果

小林 海, 黒川貞生, 亀ヶ谷純一, 矢島忠明, バレーボール研究 15(1); 1-7, 2013

筋活動様式の違いが収縮時の下腿三頭筋の筋形状におよぼす影響

佐久間淳, 黒川貞生, 武蔵丘短期大学紀要 21, 2013 (印刷中)

青少年期の運動経験が中高年者の下肢筋力および骨強度に及ぼす影響

土屋陽祐, 亀ヶ谷純一, 森田恭光, 越智英輔, 齋藤里美, 濱野早紀, 黒川貞生

カルチャー (明治学院教養教育センター紀要) 8(1), 2014 (印刷中)

張 宏波

【学会・研究会報告】

張宏波「从“中归联”初期组织观形成看其对中国“宽大政策”的受容」東北地区中日関係史研究会
2013年年会、2013年8月7日 (中国撫順市)。

張宏波「中国側の歴史認識を『花岡和解』を通じて考える」東京東アジア文化交流会第56回シン
ポジウム『『花岡事件』67年目の課題』2013年12月22日 (飯田橋セントラルプラザ)。

【その他】

張宏波「11 あとがき 八八年と九五年の体験を『現在』にいかに関結につけるか」明治学院大学
国際平和研究所編『戦後65周年の明治学院の取り組み——東アジアの戦後和解にむけて——』非
売品、2013年3月、152-154頁。

張宏波・石田隆至・金命貞・藤田秀雄「座談会 東北アジアの和解のために何が求められているの
か」『月刊社会教育』第691号、2013年5月、16-23頁。

張宏波・石田隆至「いくつかの『慰霊』『追悼』のかたち——『花岡鉦山』と『相模湖・ダム』を
訪れて』『世界へ未来へ 9条連ニュース』第224号、2013年8月、6-7頁。

石田隆至・張宏波「解説 この記録集を読むにあたって」難波靖直編『支部報でみる中連山陰50年のあゆみ——1956.9～2005.9』私家版、2013年11月、2-3頁。

| Grimes-MacLellan, Dawn

【論文】

“It’s not just economic factors...”: The pervasive gender gap in 21st century Japan. *Karuchuru* 8(1), 2014年3月 (in press).

Exploring Synchronous Computer-Mediated Instruction in a Japanese university EFL classroom. *Karuchuru* 8(1), 2014年3月 (joint with J. Kevin Varden; in press).

【学会発表】

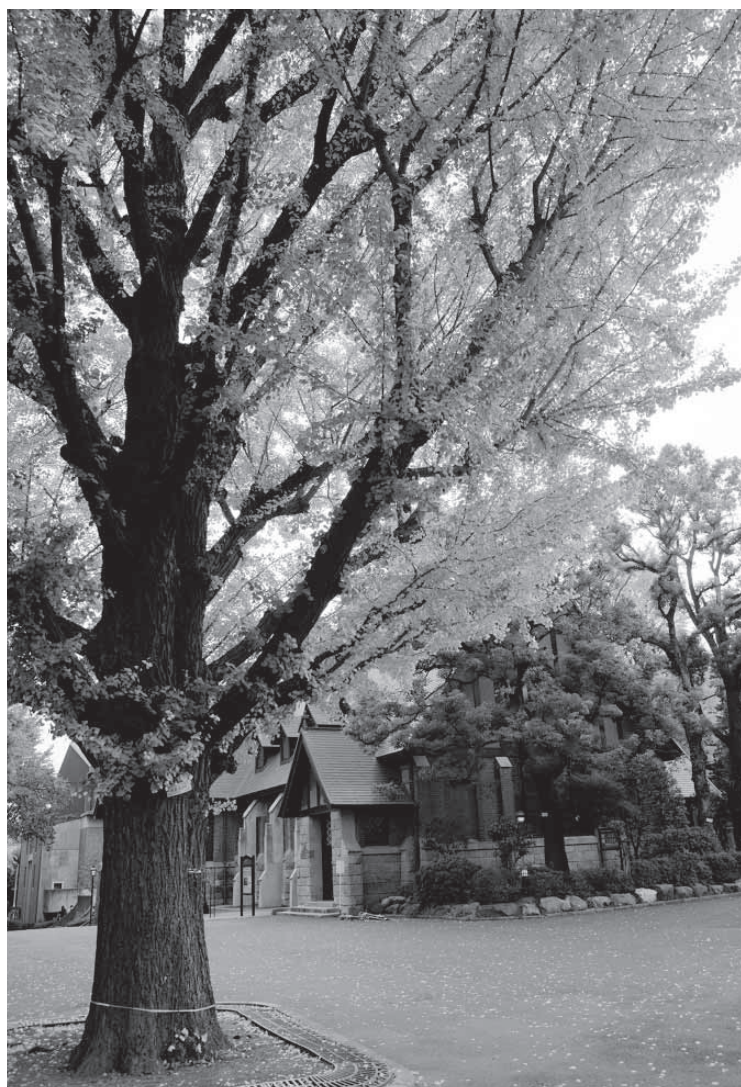
“But this is not a kindergarten jump rope...”: Second-culture learning among newcomer children and their parents in Japan,” 2013年11月、American Anthropological Association 112th Annual Meeting (シカゴ).

【司会者】

“Foregrounding: Making the role of culture explicit in schools,” 2013年11月、American Anthropological Association 112th Annual Meeting (シカゴ).

| Varden, J. K.

Exploring Synchronous Computer-Mediated Instruction in a Japanese university EFL classroom. *Karuchuru* 8.1 2014年3月 (joint with Dawn Grimes-MacLellan; in press).



明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報
SYNTHESIS 2013

2014年3月31日

編集代表	鈴木 義久
発行者	鈴木 義久
挿画	土方 淳代
発行	明治学院大学 教養教育センター附属研究所 〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518 電話 045-863-2067
印刷	株式会社 外為印刷



SYNTHESIS 2013
シンセシス

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報